

第 1 部

令和 5 年度の活動報告

第 1 章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

第 2 章 授業研究を通じた教師の学びのデザイン～「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」活動報告～

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

本章では、CoREFが自治体等と連携して行ってきた協調学習の授業づくりプロジェクトの令和5年度の活動について報告します。

第1節では、私たちの研究連携の基本的な枠組みについて解説します。

第2節、第3節では中核となる研究連携事業である「新しい学びプロジェクト」、「未来を拓く『学び』プロジェクト」について、それぞれ今年度の活動報告を行います。

第4節では、自治体の枠を超えて、これらの研究連携の核となる先生方を伸ばす試み、「本郷学習科学セミナー」について報告します。

第5節では、学校外の学びの場をデザインするプロジェクトの一例として、「ジュニアドクター育成塾」事業（科学技術振興機構（JST））について報告します。

第6節では、今年度CoREFが講師を務めた関連の研修等について一覧で報告します。

- 第1節 協調学習の授業づくりプロジェクトとは
- 第2節 新しい学びプロジェクト
- 第3節 未来を拓く「学び」プロジェクト
- 第4節 本郷学習科学セミナー
- 第5節 ジュニアドクター育成塾
- 第6節 今年度の研修実施状況一覧

1. 協調学習の授業づくりプロジェクトとは

(1) 研究連携の基本的な枠組み

CoREFでは、学習科学の知見を基盤に、平成22年度から全国の教育委員会及び学校や学校間ネットワークと連携し、一人一人の子ども達が自分で考え、考えや視点の違う他者との関わりを通じて自分の理解を見直し、深めていく学び（＝協調学習）を教室で実現するための協調学習の授業づくりプロジェクトを展開してきた。

プロジェクトの基盤となる活動は、「知識構成型ジグソー法」という1つの授業手法を核として、教材検討、実践、学習評価、振り返りという授業研究のサイクルを地域、校種、教科を超えた先生方と研究者が協同で回し続けることである（図1）。

またこうした基盤を維持、発展させるために、それぞれのローカル（教育委員会や学校等）な拠点での研修や仕組みづくり、ローカルな拠点間

のネットワークづくりを行い、それぞれの組織が自分たちの課題に即して実践研究を行いながら、同じ課題を共有する仲間同士のネットワークを生かして発展する関係を構築してきた。こうしたネットワークには、課題に応じて産業界や他組織の研究者等も参画している（表1）。

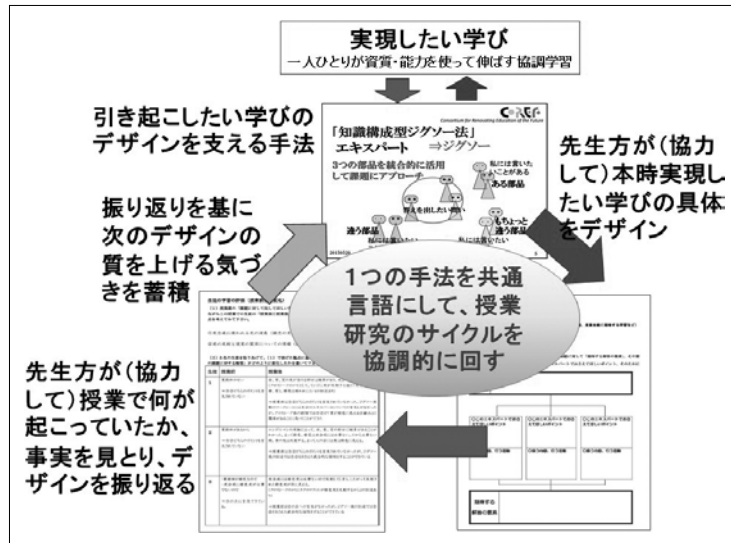


図1：CoREFの研究連携の基本的な枠組み

実践者	研究者（CoREF）	行政関係者
・「知識構成型ジグソー法」の型を使った授業の実践	・「知識構成型ジグソー法」の型の提供	・治体の教育課題に応じた「知識構成型ジグソー法」の活用
・オンラインでの協調的な授業デザイン検討		・CMSやメーリングリストによる協調的な授業デザイン検討の場の提供
・研修会参加 ・共通の枠組みでの振り返り	・研修や振り返りのためのツールのデザイン・提供	・研修会参加 ・実践や振り返りの共有化
・新しい課題の発見とそれに即した取組の見直し		

表1：プロジェクトにおける実践者、研究者、行政の役割

(2) プロジェクトで目指すもの

プロジェクトで私たちが目指し続ける先は、(1) 一人一人が自分で考え、考えや視点の違う他者との関わりを通じて自分の理解を見直し、深めていくような学び方が学校の内外で当たり前になること、(2) そのために、どうしたらそのような学びを（当面教室で）実現できるか、学びのデザインをする立場の人たち（当面教師や研究者）が自分なりの学習科学を行い続けるのが当たり前になることである。また、(3) その先に、社会全体として、すべての人が生まれ持った賢さを十分に発揮し、伸ばし続けていけるような環境をデザインすることが常識化していくとよい。

例えば、私たちのプロジェクトでは、「知識構成型ジグソー法」という手法を使った授業づくりを行っている。みんなが答えを出したい、しかし一人では十分な答えが出ない課題がある環境下で、一人一人が違った、でもどれも役に立つらしい考えを持っているという状況を作ってあげることによって、学習者は、(少なくともそうでない状況よりはずっと) 主体的に考えながら、他者の考えを基に自分の考えを見直し、深めることをしやすくなるのではないか、という仮説に基づいた授業手法である。学習者が自分の持っている賢さをより発揮しやすい／発揮する必然性がある環境、状況を作ってあげることによって、その賢さを引き出し伸ばす。これが協調学習の授業づくりプロジェクトの核となるコンセプトである。

そのうえでもう1つ重要なのは、もちろん、(他のどの手法でも同じだろうが)「知識構成型ジグソー法」という手法で授業を進めさえすれば、必ずしも今言ったようなことが起こるわけではないということである。例えば、「一人では十分な答えが出ない課題がある環境」を作ってあげるためには、目の前の学習者にとって、了解可能で、かつ一人では十分な答えが出ない課題は何かを学習環境をデザインする側（この場合は教師）が同定し、適切な課題を提示してあげる必要がある。

しかも、それが本当に目の前の学習者にとって適切な課題だったかは、蓋を開けてみるまでは分からない。もちろん、経験を重ねた教師であればより確からしく適切な課題を設定できるようになるが、同じ子ども、同じ授業は二度とない以上、一回一回の授業は常に（これまでの経験と観察事実に基づいて作った）学びの仮説を検証する場になる。

そう考えると、目指す学びをより確からしく実現していくためには、「こんな課題を設定したら子ども達はこう学んでくれるのではないか」「この資料からこんなことを考えるのではないか」といった学びについての仮説を立て、それを実際の授業の中で試していく（＝アクション・リサーチ）ことの繰り返しが欠かせない。この繰り返しの中で、「子どもはこう学ぶのか」「だったらこうしたらより彼らの力を引き出せるはず」と一人一人の実践者が言えること、できることの質を上げ続けていくことこそ、換言すればすべての教師が自分なりの学習科学を行い続けることである。そして、こんな風にすべての教師が自分なりの学習科学を行い続けることは、学びの質を上げ続けていく学校、そのことを楽しみ続ける教師集団につながっていくはずである。

(3) プロジェクトで大事にしていること

協調学習の授業づくりプロジェクトをこのゴールに向けて前進させていくために私たちが大事にしているのは、実現したい学びのビジョンを共有すること、学びの事実に基づくこと、学びのプロセスに着目することである。

授業研究のPDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルの重要性が言われて久しいが、そもそもどんな学びを実現したいのかのビジョンがしっかり共有されていないと、サイクルが次の学びの質を上げるにつながらない。

例えば、全員が同じ答えを同じように再生できることを学びのゴールイメージにしてしまったら、子ども達の頭や心はどう働くだろうか？それは実現したい頭や心の働きだろうか？今日のねらいに向けて、他者との関わりを通じて一人一人の子どもが理解を深めていくときにどんな思考や対話が起こってくれるとよいか。具体的なビジョンを持ち、共有することを大事にしたい（とはいえ、これを最初から行うのはなかなか難しい面もある）。

次に、学びの事実に基づくこと。「子どもがどう学ぶか」を問題に授業づくりをしているのだから、授業について語る時、常に子どもがどう学んだか、つまりいたか、学びの事実即して語ることは大前提である。そのうえで、今強調したいのは、子ども達は今日の授業の中でどのように思考し、対話しているのか、なるべくたくさんの学びの事実を手掛かりに、学びのプロセスに着目することの重要性である。

例えば、授業の最後に全員が及第点の答えを書いてくれた。これも1つの学びの事実である。しかし、この事実からだけで子ども達がどう学んだか、学びのプロセスについて推測できることはあまり確かではない。例えば、全員が1時間自分なりに考え理解を深めた結果そうなったのか、授業の最初から分かっていたのか、授業の大半はぼーっとして最後に先生か誰かのまとめた答えを使って書いただけだったのか。

学びのプロセスに着目すると言ったときには、子ども達の一人一人の話していること、書いていることを材料にして、授業の前後で子ども達一人一人がどのように理解を変容させたか、その間で彼らは何にこだわって、どんな風に理解を進めていたのか、仲間とのどんな関わりが理解を見直すきっかけになったのか、授業の中での彼らの頭や心の働きをなるべく確からしく推測することを目指している。

子ども達の頭の中をそのままのぞき込むことができない以上、学びのプロセスについて私たちの見とりとはあくまでもその断片的な解釈であり、仮説である。しかし、こうして学びのプロセスを丁寧に見とろうとすることは、また次のPDCAサイクルにおいて、より確からしく実現したい学びのイメージを作ることにもつながり、その質を上げていく。最後にもう一点、プロジェクトで大事にしていることは、こうしたサイクルを一人一人の先生方の問題にせず、先生方のローカルなコミュニティ、そしてコミュニティ同士のネットワークで回していけるようにすること、そのための環境を整備していくことである。

本章第2節以降では、こうしたプロジェクトの具体的な枠組みを紹介し、今年度の活動を報告していく。

2. 新しい学びプロジェクト

(1) 連携事業の概要

「新しい学びプロジェクト」は、平成22年度より開始したCoREFと市町教育委員会、学校等との小中高等学校における協調学習を引き起こす授業づくりのための研究連携事業である。研究連携の中心的活動は、「知識構成型ジグソー法」を活用した授業に焦点をあてた授業研究のサイクルを、住む地域、教えている学校、そして教員歴も多様な実践者とCoREFスタッフが、ウェブ上のネットワークも活用しながら協調的にまわしていくことである。平成24年度から「新しい学びプロジェクト」に参加する市町教育委員会等は、「新しい学びプロジェクト研究協議会」という組織を立ち上げ、この研究協議会とCoREFとが連携して「新しい学びプロジェクト」として活動を行っている。

研究連携の具体的な方法として、各参加団体は国語、算数・数学、理科、社会、英語の5教科の部会から任意の部会（複数可）に、研究推進員となる教員を参加させ、研究推進員は教材開発を中心とした活動を行う。研究推進員の数は自治体の任意である。また、研究推進員に加え、サポートメンバーという形で研究に携わる教員も設定されている。参加団体の中には、校内のすべての先生方をサポートメンバーとしている学校もある。

参加団体は、指導主事や学校管理職ないしそれに準ずる職員を1名以上研究推進担当者として用意し、研究連携の事務的なサポートを行っている。また、参加団体間及び研究協議会とCoREFとの連絡業務を円滑に行うために、研究推進担当者の代表が事務局を務める。

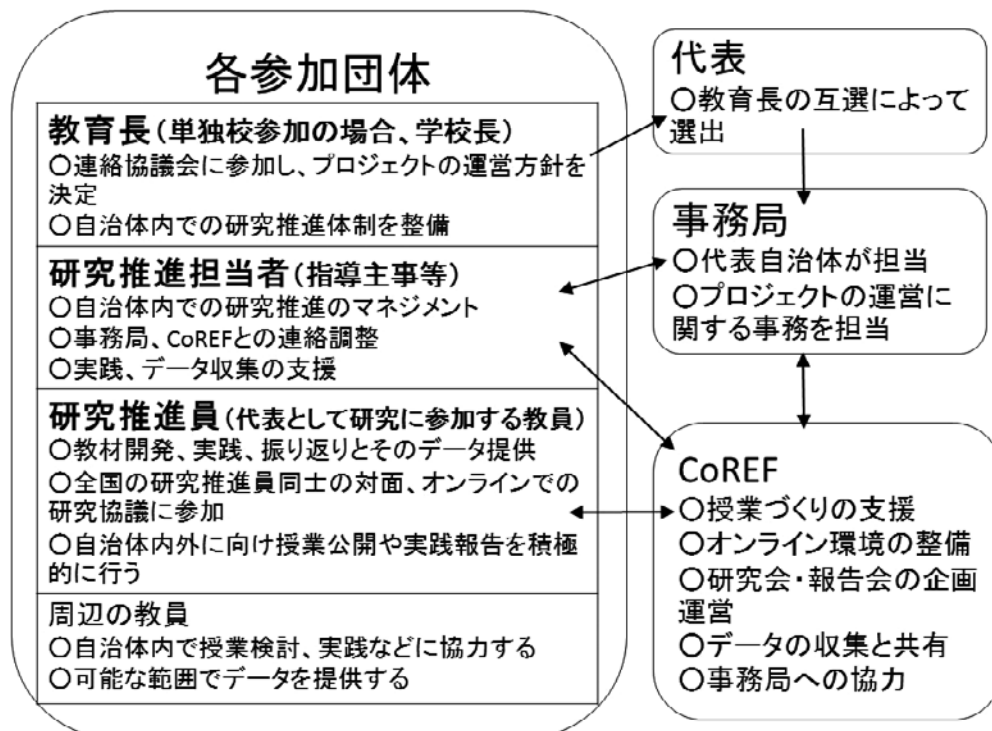


図2: 「新しい学びプロジェクト」研究の進め方

(2) 今年度の事業の報告

①今年度の組織体制

今年度の「新しい学びプロジェクト」参加団体は、表2の21都道府県32団体である。「新しい学びプロジェクト」研究協議会は、参加団体から互選で代表、副代表を選任している。今年度の代表は埼玉県教育委員会日吉亨教育長が務め、埼玉県が事務局を担当した。

<p>【北海道】 様似町、【栃木県】 宇都宮新しい学びプロジェクト研究協議会、【群馬県】 群馬新しい学びプロジェクト・ネットワーク、【埼玉県】 埼玉県、戸田市、久喜市、【東京都】 東京都市大学等々力中学校・高等学校、品川区立八潮学園【神奈川県】 清川村立緑中学校、【長野県】 文化学園長野中・高等学校、【静岡県】 静岡前向き授業づくりネットワーク、【愛知県】 学校法人中部大学 中部大学第一高等学校、【京都府】 京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会、【和歌山県】 有田川町、【大阪府】 清風学園清風中学校・高等学校、【兵庫県】 創志学園クラーク記念国際高等学校、高砂市教育委員会、【鳥根県】 鳥根県、津和野町、浜田市、【岡山県】 瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト、【広島県】 安芸太田町、せらにし教育研究会、ひろしま新しい学びプロジェクト研究協議会、みやじま教育研究会【山口県】 山口県新しい学びプロジェクト研究協議会、【高知県】 高知県教育センター、【福岡県】 飯塚市、【大分県】 大分県教育センター、九重町、豊後高田市、【宮崎県】 延岡市</p>

表2：令和5年度「新しい学びプロジェクト」参加団体

また、今年度各参加団体から研究推進員として登録された教員数は表3の通りである。全体で218名の研究推進員が登録された。この他にサポートメンバーとして1,132名が登録されており、計1,350名が今年度の研究に携わる教員として登録されている。

また今年度は、「協調学習の授業づくりにおいて指導的役割を担う人材」として各参加団体からの推薦で40名の「協調学習マイスター」を任命し、研修等でご活躍いただいた。

国語	社会	算数・数学	理科	英語	その他
41	35	55	30	18	39

表3：令和5年度「新しい学びプロジェクト」教科別研究推進員数（名）

②今年度のスケジュール

今年度の事業の主なスケジュールと概要は表4の通りである。

a) 連絡協議会

「新しい学びプロジェクト」のビジョンと運営方針は、年度の初めと年度末に行われる教育長、研究推進担当者による連絡協議会で決定される。この連絡協議会では、新規参加を検討される団体のオブザーバー参加も歓迎している。

b) 研究推進員等実践者の活動

「新しい学びプロジェクト」で実践研究を行う研究推進員、サポートメンバー、参加団体外に異動したOB等の先生方は、参加団体内のローカルなコミュニティでのやりとりに加え、全国のメンバーとやりとりできるメーリングリスト、過去のメーリングリストのやりとりや開発教材を閲覧できる「学譜システム」（第2部第3章第2節を参照）を活用した教科部会での授業づくり、実践報告を随時行っている。このメーリングリストには、令和6年1月現在、2,000名超の実践者、教育行政関係者、研究者などが登録されている。

日程	イベント・会場	概要
随時	授業研究	参加団体内のローカルなコミュニティやメーリングリスト、学譜システムを活用した教科部会での授業づくり、実践報告
5月8日	第1回連絡協議会 @京都市立西院小学校(ハイブリッド開催)	教育長、研究推進担当者が集まって、今年度の研究推進体制と研究の進め方を確認
7月29日	拡大研究推進員会 教育長担当者会議 (遠隔同期)	午前《全体会》 学譜システムを活用した授業研究のワークショップ 午後《教育長担当者会議》 各参加団体内の研究推進に関する教育長・担当者の情報交換 午後《第1回教科部会》 教材検討及び実践交流
11月24日 25日	授業研究会@清風学園 (対面開催)	1日目：公開授業研究会 2日目：子どもの学びのシミュレーションによる授業検討
12月15日 16日	授業研究会@延岡市 (対面開催)	1日目：公開授業研究会及び研究発表、後援 2日目：ビデオ記録による授業研究会及び実践交流
1月27日	第2回連絡協議会／ 教科部会 @聖心女子大学 (ハイブリッド開催)	《第2回連絡協議会》 教育長、研究推進担当者が集まって、各参加団体の研究状況を交流、全体としての今後の研究の進め方を協議 《教科部会》 教科ごとに実践交流を行い、授業デザイン原則をまとめる
1月28日	報告会@聖心女子大学 (ハイブリッド開催)	表5参照のこと

表4：令和5年度「新しい学びプロジェクト」年間スケジュール

日常的に行っている授業づくりのやりとりの他に、授業研究に関するワークショップ、実践者による教科部会と管理職・教育行政関係者による教育長担当者会議からなる拡大研究推進会、年2回の授業研究会、報告会と同時開催で行う教科部会などの研究会がある。これらへの参加は任意である。授業研究会を除くイベントは、全国からの参加のしやすさを考慮して、オンラインもしくはオンラインと対面とのハイブリッド開催で行っている。

c) 報告会

令和6年1月28日には、「教師が育つ授業研究コミュニティに向けて」と題し、聖心女子大学を会場にハイブリッド開催で年次報告会を行った。報告会には、新しい学びプロジェクトご関係の先生方103名（対面参加82名、オンライン参加21名）、教育行政関係者、学校関係者、研究機関、一般企業から106名（対面参加32名、オンライン参加74名）の計209名の参加申込をいただいた。なお、この報告会は、文部科学省委託事業「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」（聖心女子大学）の成果報告会と兼ねて行ったものである。

趣旨説明 教育環境デザイン研究所 主任研究員／聖心女子大学 客員准教授 飯窪 真也
ラウンドテーブル「小・中・高等学校の各教科における『知識構成型ジグソー法』の授業づくりと実践について」 *主に国語、社会、算数、数学、理科、英語の授業実践について、教科ごとの実践報告と意見交換
パネルディスカッション「教師が育つ授業研究コミュニティに向けて」 宮崎県 延岡市立東小学校 教諭 宮田 諒 清風学園清風中学校 教諭 清原淳史 広島県 安芸太田町教育委員会 教育長 二見吉康 聖心女子大学 教授／一般社団法人教育環境デザイン研究所 理事 益川弘如 共立女子大学 講師／一般社団法人教育環境デザイン研究所 研究員 齊藤萌木 〈コメント〉 文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 課長 後藤教至 独立行政法人教職員支援機構 審議役 佐野壽則 聖心女子大学 教授 今川恭子 〈司会〉 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 副部長／ 一般社団法人教育環境デザイン研究所 理事 白水 始

表5：令和5年度「新しい学びプロジェクト」報告会 プログラム

パネルディスカッション「教師が育つ授業研究コミュニティに向けて」では、まず今年度全国公開の授業研究会を担当いただいた清風学園清風中学校及び延岡市教育委員会の先生方にご登壇いただき、授業研究を通じての自身の成長や気づきについてお話しください。

た。これまで対話を大事にしたいと思いつつも教師主導の授業になりがちだったという延岡市立東小学校の宮田教諭は、1年間のジグソーの授業づくりの取組を通じて、「分からないことを分からないと言える」ようになった子ども達の変化とともに、子どもの発言を予想しながら授業を作ることができるようになったとご自身の変化を振り返ってくださった。また清風中学校の清原教諭は、今回初めて他教科の先生方と教科の壁を越えた授業研究を行ったことで、同じ教科の先生方だけでは気づけない初学者の目線から教材を見直すことができ、自身の授業研究の幅が広がったと語ってくださった。

パネルディスカッションの後半では、安芸太田町教育委員会二見教育長から先生方の学びを支える教育委員会の役割について、聖心女子大学益川教授から本プロジェクトの授業研究のリソースや手法を活用した大学でのオンデマンド授業研究の実践についてお話しいただいた。長年安芸太田町教育委員会の教育長を務められ、このプロジェクトをリードしてこられた二見教育長は、どの自治体も抱える悩みである先生方の異動に伴う中核的な先生方の流出について、「太い大根を抜けば、その隣に次の太い大根が育つ」ように、新しく中核となる先生方が育つチャンスだと語られ、実際に14年の取組の中で次々に新しい人材が育ってきたことを示された。また、育った人材を県教育委員会等の指導主事として送り出すことで、県教育委員会にも町の取組に対する理解が広がってきたという。先生方が学び続ける環境を前向きにデザインしていくために、教育委員会はどのようなビジョンを持ち、アクションをかければよいか、重要な示唆をいただいた。益川教授による聖心女子大学でのオンデマンド授業研究の実践については、本報告書第1部第2章第5節で詳しく報告しているのでそちらを参照いただきたい。また、CoREFの齊藤研究員は、プロジェクトの授業研究のエッセンスについて「複雑な学びの過程を見とるのには、事前に想定をしておく必要がある」「学びの過程を見とる目は、授業研究サイクルを繰り返し回すことをとおして、授業力と一体的に育てる」と整理し、授業研究を1回の授業の正否を問題にしたものでなく、授業研究を通じて教師が子どもの学び方やつまづき方を知り、中長期的に子どもの学びの質を上げていくためのものとして捉えなおす重要性を指摘した。

こうした報告に対して、大学（教員養成）、教員研修、国の教育行政の立場からご参加いただいた今川教授、佐野審議役、後藤課長にそれぞれの実践についてのお話もいただきながら、「子どもの学びと大人の学びは相似形」であること、子どもの学びの過程に焦点をあてた授業研究で教師は変わることを再確認し、そうした教師の対話的な学びの場としての授業研究を行政はどのように支えていきうるかについて考えを深めることができた。

③各参加団体の取組

プロジェクト全体の活動と並行し、各参加団体はそれぞれの枠組みで実践研究を進めている。今年度事務局に報告された公開研究授業等（令和4年度の3学期分を含む）233授業を表6、7、8、9に一覧で示す。

令和5年度活動報告書 第14集

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
1	2022年11月24日	飯塚市教育委員会	飯塚市立穂波東小学校	小6	石田 昇一	理科	月の形と太陽
2	2022年11月30日	飯塚市教育委員会	飯塚市立庄内小学校	小4	芝山 拓郎	理科	とじこめた空気と水
3	2022年12月1日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小3	小椋 智弘	理科	音を出して調べよう
4	2022年12月8日	飯塚市教育委員会	飯塚市立鯉田小学校	小4	北内 志麻	理科	ものあたままり方
5	2022年12月20日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	山際 紗月	国語	君は「最後の晩餐」を知っているか
6	2023年1月16日	浜田市教育委員会	浜田市立旭中学校	中2	前原 靖子	英語	Healthy Life(けんこうな生活)
7	2023年1月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小1	西村 美雪	算数	おおきな数
8	2023年1月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小3	河野 千恵	算数	分数(発展問題)
9	2023年1月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小6	中村可南子	算数	比例と反比例
10	2023年1月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小6	中村可南子 穴田 朋香	算数	ランドルト環「比例と反比例」
11	2023年1月23日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小4	井手 綾葉	社会	焼き物を生かしたまちづくり
12	2023年1月26日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小5	大久保 優	体育	マット運動
13	2023年1月30日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	算数	面積のはかり方と表し方
14	2023年2月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	三角 寿美	社会	近代国家に向けて
15	2023年2月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	五島 暁人	理科	地層の広がり
16	2023年2月10日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小2	所 睦	算数	はこの形
17	2023年2月6日	飯塚市教育委員会	飯塚市立庄内中学校	中1	服部 佳祐	数学	空間図形
18	2023年2月7日	島根県教育委員会	島根県立瀬戸高等学校	高1	江角 美紀	家庭	環境に配慮した食生活宣言をしよう
19	2023年2月10日	島根県教育委員会	島根県立情報科学高等学校	高2	布野 勇介	保健体育	日本人のがんによる死亡率を減らそう
20	2023年2月10日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中1	和田 伴	家庭	家族の住まいを安心・安全に
21	2023年2月15日	清風学園 清風中学校・高等学校	清風高等学校	高1	吉田 翔大	英語	The Giving Tree
22	2023年2月16日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	清住 秀久	理科	自然を守る
23	2023年2月16日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小3	河本 聖志	算数	問の数に注目して
24	2023年2月16日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	清住 秀久	理科	自然保護とはーツキノワグマの出没とはー
25	2023年2月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	杉本 美紀	英語	冬休みの日記
26	2023年3月14日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	山際 紗月	国語	菊池寛「形」
27	2023年3月23日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高2	山根 幸久	英語	未来の中学生に伝える
28	2023年4月15日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中3	丸山 智	数学	式の展開
29	2023年4月19日	OB等	廿日市市立七尾中学校	中3	生田 泰文 中村 達也 戸川 雅子	道徳	オレと孝一
30	2023年4月25日	OB等	廿日市市立七尾中学校	中3	生田 泰文 中村 達也 戸川 雅子	道徳	伝説のコーチ
31	2023年4月26日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	永井 孝直	美術	人類が描き続けてきたものー世界の遠近法をみつめてー
32	2023年4月27日	OB等	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	メンデルの遺伝の法則
33	2023年5月8日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	永井 孝直	美術	ロゴデザイン(形)
34	2023年5月9日	クラーク記念国際高等学校	クラーク浜松キャンパス	高1	瀬崎 晃	国語	現代の国語「水の東西」
35	2023年5月9日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小2	広橋隼太郎	道徳	およげなひらきさん
36	2023年5月9日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	藤並 進	社会	日本と世界との時差
37	2023年5月9日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	植田 佳子	音楽	ジョーズのテーマ
38	2023年5月9日	OB等	廿日市市立七尾中学校	中1-3	森中 清貴 木下 美紀 堀田 大輔	道徳	LINEトラブル・どんな勇気なら
39	2023年5月16日	OB等	廿日市市立七尾中学校	中3	生田 泰文 中村 達也 戸川 雅子	道徳	二通の手紙
40	2023年5月24日	島根県教育委員会	島根県立隠岐島前高等学校	高2	石飛あゆみ	英語	Ethical fashion
41	2023年5月24日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	藤並 進	社会	太平洋戦争の開始
42	2023年5月24日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立筒賀小学校	小5	穴田 朋香	算数	わくわく算数教室
43	2023年5月24日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立筒賀小学校	小2	新宅裕美子	図工	かたちいろいろのせかい
44	2023年5月29日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中2	五島 暁人	理科	雨粒の運動の様子
45	2023年5月29日	久喜市教育委員会	久喜市立江面小学校	小5	松本 千春	算数	合同な図形
46	2023年6月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小1	甲斐 舞羽	算数	なんぼんめ
47	2023年6月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小2	小坂 法美	音楽	ドレミであそぼう
48	2023年6月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	所 睦	算数	角の大きさ
49	2023年6月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	田村 麗子	算数	分数のわり算
50	2023年6月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	田村 麗子	算数	文字と式
51	2023年6月1日	瀬戸(OKAYAMA)新しい学びプロジェクト	倉敷市立玉島高等学校	高2	クラス担任		主催者教育
52	2023年6月1日	OB等	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	単元プラン「ニュートン力学入門」
53	2023年6月9日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小1	中村可南子	算数	なんぼんめ
54	2023年6月10日	瀬戸(OKAYAMA)新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高2	金城和也	理科	血液の循環
55	2023年6月15日	瀬戸(OKAYAMA)新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高2	絹田昌代	国語	鷲田清一「自他の問合い」
56	2023年6月15日	クラーク記念国際高等学校	クラーク千葉キャンパス	高1	濱田 知真	数学	数学I「数と式」
57	2023年6月15日	瀬戸(OKAYAMA)新しい学びプロジェクト	瀬戸市立長船中学校	中2	実践者不明	社会	琉球王国やアイヌ民族との関係
58	2023年6月15日	飯塚市教育委員会	飯塚市立額田小学校	小6	森方 辰史	理科	土地のつくりと変化

表6：令和5年度「新しい学びプロジェクト」に関する協調学習の公開研究授業等一覧(1/4)

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
59	2023年6月15日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	生田 泰文 中村 達也 戸川 雅子	道徳	一志の弁当
60	2023年6月15日	久喜市教育委員会	久喜市立江面小学校	小6	己谷 麻未	算数	小数のしくみを調べよう
61	2023年6月16日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小2	新宅裕美子	音楽	ドレミであそぼう
62	2023年6月16日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	所 睦	算数	考える力をのばそう
63	2023年6月16日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	所 睦	算数	ちがいに着目して
64	2023年6月16日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高2	山根 幸久	英語	日本について考える
65	2023年6月20日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小6	西村 美雪	算数	分数のわり算
66	2023年6月20日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小4	細川 隆典	算数	角の大きさ
67	2023年6月20日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校T授業	小2	新宅裕美子	算数	どんな計算になるのかな
68	2023年6月21日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	山際 紗月	国語	短歌に親しむ
69	2023年6月21日	九重町教育委員会	九重町立野上小学校	小2	佐藤奈留美	国語	きつねのおきやくさま
71	2023年6月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小5	穴田 明香	算数	合同な図形
72	2023年6月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小6	三戸 晴加	算数	文字と式
73	2023年6月23日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	藤田 恭兵	国語	星の花が降るころに
74	2023年6月28日	九重町教育委員会	九重町立野矢小学校	小5	小幡 千聖	社会	米作りのさかんな地域
75	2023年6月28日	OB等	江府町立奥大山江府学園	小3	高田由佳り	国語	はりねずみと金貨
76	2023年6月29日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小5	林田 渉	社会	米作りのさかんな地域
77	2023年6月30日	浜田市教育委員会	浜田市立雲城小学校	小4	松原 裕	理科	とじこめた空気と水
78	2023年6月30日	浜田市教育委員会	浜田市立雲城小学校	小6	村上 哲也	理科	てこのはたらき
79	2023年7月4日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	住岡 美穂	数学	三元一次方程式
80	2023年7月5日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小3	佐々木将浩	算数	あまりのあるわり算
81	2023年7月5日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小4	大久保 優	算数	小数のしくみ
82	2023年7月5日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小4	飯塚 高晴	社会	ごみのしりと利用
83	2023年7月6日	飯塚市教育委員会	飯塚市立鯉田小学校	小3	池上 智子	国語	「ほけんだより」を読み比べよう
84	2023年7月6日	浜田市教育委員会	浜田市立三隅中学校	中3	寺田 昇平・ 岩本 侑代	理科	生命の連続性（外来種）
85	2023年7月7日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸内市立長船中学校	中1	直原 絵美	国語	詩の世界
86	2023年7月7日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	田村 麗子	算数	比
87	2023年7月10日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立戴星学園	小4	松口 奈美	算数	複合図形
88	2023年7月10日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立戴星学園	中2	河野 友博	社会	近畿地方
89	2023年7月10日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立戴星学園	中3	山崎 正勝	理科	仕事とエネルギー
90	2023年7月13日	島根県教育委員会	島根県立大田高等学校	高1	中島 優希	国語	伊勢物語（芥川）
91	2023年7月13日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	小野 綾音	道徳	みんなでとんだ！
92	2023年7月14日	浜田市教育委員会	浜田市立第三中学校	中2	月橋 剛弥	社会	中国・四国地方
93	2023年7月14日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高1	上田 淳平	数学	2次関数の決定
94	2023年7月15日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高2	川上 真	理科	過不足のある化学反応の量的関係
95	2023年7月15日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	力学的エネルギー
96	2023年7月18日	延岡市教育委員会	延岡市立一ヶ岡小学校	小6	廣瀬 真宏	社会	天皇中心の国づくり
97	2023年7月19日	島根県教育委員会	島根県立矢上高等学校	高2	吉村 竜成	数学	線形計画法
98	2023年8月2日	OB等	甘日市市立七尾中学校	教員研修	原田 優次	理科	硫酸ナトリウム水溶液に電流を流すと
99	2023年8月2日	OB等	甘日市市立七尾中学校	模擬授業	原田 優次	道徳	クラスの“空気”を見直してみよう
100	2023年8月31日	高知県教育センター	青島日本人学校	中1	久万 真央	国語	「星の花が降るころに」（国語1 光村図書）
101	2023年9月1日	有田川町教育委員会	有田川町立金屋中学校	中1	堀内 誠也	社会	アフリカ州
102	2023年9月1日	有田川町教育委員会	有田川町立金屋中学校	中3	上道 賢太	数学	関数（グラフの活用）
103	2023年9月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小3	大上 優那	算数	大きい数のしくみ
104	2023年9月1日	高知県教育センター	青島日本人学校	小5	久万 真央	国語	「たずねごと」（国語五銀河 光村図書）
105	2023年9月4日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	単元プラン「周期表とイオン」
106	2023年9月12日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中2	椎原 素哉	保健体育	喫煙の害と健康
107	2023年9月13日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中2	永井 孝直	美術	優れた椅子
108	2023年9月13日	高知県教育センター	青島日本人学校	中3	久万 真央	国語	「故郷」（国語3 光村図書）
109	2023年9月14日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中3	若林 龍太	理科	天体の動きと地球の自転・公転
110	2023年9月15日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山市立瀬戸中学校	中3	検峰 亮	国語	挨拶
111	2023年9月19日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高2	佐伯友紀子	国語	鴻門之会
112	2023年9月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中2	石村 勇樹	数学	一次関数
113	2023年9月20日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小3	岡井 優司	算数	大きい数のしくみ
114	2023年9月20日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小5	穴田 明香	社会	これからの食料生産
115	2023年9月20日	島根県教育委員会	島根県立大田高等学校	高3	富田 泰範	国語	小説の読解 岡本かの子「快走」
116	2023年9月20日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小1	中村可南子	算数	わかりやすく整理しよう
117	2023年9月20日	九重町教育委員会	九重町立野矢小学校	小6	池部 聖崇	社会	室町時代
118	2023年9月21日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小4	原田 百果	算数	小数のしくみを調べよう
119	2023年9月21日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸内市立長船中学校	中1	直原 絵美	国語	大人になれなかった弟たち
120	2023年9月21日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン1「イオン結合」
121	2023年9月22日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小5	井手 綾葉	社会	これからの食料生産

表7：令和5年度「新しい学びプロジェクト」に関する協調学習の公開研究授業等一覧（2/4）

令和5年度活動報告書 第14集

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
122	2023年9月25日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高2	佐伯友紀子	国語	島崎藤村「小讀なる古城のほとり」
123	2023年9月25日	OB等	江府町立奥大江山府学園	小4	黒見真由美	国語	一つの花
124	2023年9月26日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高2	絹田 昌代	国語	大鏡「花山天皇の出家」
125	2023年9月27日	延岡市教育委員会	延岡市立南方小学校	小5	東 貴秋	社会	水産業のさかんな地域
126	2023年9月28日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小3	知久照太郎 吉田 和月	保健体育	けんこうな生活
127	2023年9月29日	九重町教育委員会	九重町立東飯田小学校	小6	川崎 裕太	音楽	バイオリンとピアノのためのソナタ第4楽章
128	2023年9月29日	OB等	甘日市立七尾中学校	中3	原田 優次	道德	座右の銘
129	2023年10月3日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸市内立長船中学校	中2	実践者不明	社会	京都・奈良と歴史的景観の保全
130	2023年10月4日	九重町教育委員会	九重町立野矢小学校	小2	藤原 規子	算数	かけ算（1）
131	2023年10月4日	OB等	甘日市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン2「イオン化合物の化学式」
132	2023年10月5日	OB等	江府町立奥大江山府学園	中1	亀井 麻美	英語	人の紹介文を書こう
133	2023年10月5日	島根県教育委員会	島根県立出雲商業高等学校	高3	佐藤 魁人	国語	こころ
134	2023年10月5日	OB等	江府町立奥大江山府学園	小3	高田由佳り	国語	サーカスのライオン
135	2023年10月5日	OB等	江府町立奥大江山府学園	小5	黒見真由美	国語	注文の多い料理店
136	2023年10月6日	島根県教育委員会	島根県立情報科学高等学校	高1	高橋 諒太	保健体育	保健
137	2023年10月6日	浜田市教育委員会	浜田市立三隅中学校	中2	山口 孝知	国語	伝統文化を味わう（漢詩）
138	2023年10月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小3	佐々木将浩	道德	長なわ大会の新記録
139	2023年10月11日	九重町教育委員会	九重町立ここのえ緑陽中学校	中3	小斉真理子	美術	北斎からゴッホへ
140	2023年10月12日	クラーク記念国際高等学校	クラーク東京キャンパス	高2	關口 陽介	英語	英コミュⅡ「Lesson8 Inspiration from Nature」
141	2023年10月13日	浜田市教育委員会	浜田市立雲城小学校	小3	竹田佑子	算数	円と球
142	2023年10月16日	清風学園 清風中学校・高等学校	清風高等学校	高2	玉木 佐藤 俊藤 俊史	公民	公共的な空間とあり方・生き方
143	2023年10月16日	島根県教育委員会	島根県立出雲高等学校	高1	木村 泰之	社会	地理総合
144	2023年10月18日	島根県教育委員会	島根県立大田高等学校	高1	高橋 国光	音楽	作曲者が作品に込めた思いを想像しよう
145	2023年10月18日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高3	久米 託矢	理科	酵素反応実験
146	2023年10月18日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸市内立長船中学校	中2	実践者不明	社会	東海で発達するさまざまな産業
147	2023年10月18日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	藤並 進	社会	裁判所
148	2023年10月20日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸市内立長船中学校	中2	実践者不明	社会	内陸にある中央高地の産業の移り変わり
149	2023年10月24日	島根県教育委員会	島根県立矢上高等学校	高2	吉村 竜成	数学	加法定理の導入
150	2023年10月24日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小5	梅垣 克己	社会	自動車をつくる工業
151	2023年10月24日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高1	金城 和也	理科	糖尿病
152	2023年10月25日	島根県教育委員会	島根県立松江高等学校	高1	神田 健介	社会	歴史総合
153	2023年10月25日	高知県教育センター	高知県立高知国際高等学校	高1	池川 潤也	理科	浮力
154	2023年10月26日	九重町教育委員会	九重町立野矢小学校	小6	財津 菜美	算数	比例の利用
155	2023年10月26日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小4	服部 心子	理科	すずしくなると
156	2023年10月27日	飯塚市教育委員会	飯塚市立 立岩小学校	小1	関 由美子	算数	おおきさくらべ
157	2023年10月27日	飯塚市教育委員会	飯塚市立瀬田小学校	小6	森方 辰史	理科	月の形と太陽
158	2023年10月27日	OB等	甘日市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン3「塩酸の電気分解」
159	2023年10月30日	浜田市教育委員会	浜田市立雲城小学校	小5	村上 晋也	算数	四角形と三角形の面積
160	2023年11月1日	飯塚市教育委員会	飯塚市立松本小学校	小1	三木 渉	算数	かたちづくり
161	2023年11月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	田村 麗子	社会	武士の世の中へ（元寇）
162	2023年11月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小5	西廣 直明	社会	これからの食料生産
163	2023年11月1日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	倉敷市立玉島高等学校	高2	竹田 義史	公民	公共
164	2023年11月2日	島根県教育委員会	島根県立情報科学高等学校	高1	黒田 健斗	商業	簿記
165	2023年11月6日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高1	青木徳乃美	国語	伊勢物語（筒井筒）
166	2023年11月6日	飯塚市教育委員会	飯塚市立庄内中学校	中2	服部 佳祐	数学	図形の性質と証明
167	2023年11月7日	有田川町教育委員会	有田川町立藤並小学校	小4	北山 有希	国語	世界にはこる和紙
168	2023年11月7日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高2	川上 真	理科	化学基礎
169	2023年11月7日	OB等	甘日市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン4「塩酸に溶ける金属」
170	2023年11月8日	高知県教育センター	いの町立伊野南中学校	中1	上岡 涼太	社会	アフリカ州
171	2023年11月9日	浜田市教育委員会	浜田市立三隅中学校	中2	谷口 一真	保健体育	喫煙と健康
172	2023年11月10日	島根県教育委員会	島根県立矢上高等学校	高2	萬燈 智子	国語	こころ
173	2023年11月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中2	永井 孝直	美術	抽象絵画（ピエト・モンドリアン）
174	2023年11月12日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	児童	西 美音	社会	平和で豊かな暮らしを旨として
175	2023年11月14日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	高野 真仁	社会	関東地方
176	2023年11月15日	島根県教育委員会	島根県立出雲高等学校	高2	萬代 峻	数学	ベクトルの内積
177	2023年11月15日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高2	山根 幸久	英語	環境問題について考える
178	2023年11月15日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	五島 暁人	理科	雨粒の運動の様子
179	2023年11月16日	島根県教育委員会	島根県立益田高等学校	高2	波多野和志	国語	史記

表8：令和5年度「新しい学びプロジェクト」に関する協調学習の公開研究授業等一覧（3/4）

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
180	2023年11月17日	島根県教育委員会	島根県立隠岐島前高等学校	高1	竹田 育子	英語	"What does environmentally friendly mean?"
181	2023年11月17日	島根県教育委員会	島根県立松江農林高等学校	高1	入江佳織莉	保健体育	保健
182	2023年11月17日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン5「ボルタの電池」
183	2023年11月17日	高砂市教育委員会	高砂市立荒井中学校	中2	佐野 智哉	社会	関東地方
184	2023年11月20日	埼玉県教育委員会	春日部市立武里中学校	中2	松山 萌	音楽	ベートーヴェン作曲 交響曲第5番 ハ短調
185	2023年11月20日	埼玉県教育委員会	春日部市立武里中学校	中3	小谷 勇人	社会	裁判所
186	2023年11月20日	島根県教育委員会	島根県立隠岐島前高等学校	高1	竹田 育子	英語	"What does environmentally friendly mean?"
187	2023年11月21日	島根県教育委員会	島根県立隠岐島前高等学校	高2	石飛あゆみ	英語	Innovation
188	2023年11月21日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸内市立牛窓中学校	中2	鈴木 涼平	地理	日本の諸地域 近畿地方
189	2023年11月22日	島根県教育委員会	島根県立益田高等学校	高2	武田健太郎	英語	伝記と進路 "What advice would you give?"
190	2023年11月22日	延岡市教育委員会	延岡市立南方小学校	小5	藤元 陽菜	社会	自動車をつくる工業
191	2023年11月24日	清風学園 清風中学校・高等学校	清風中学校	中2	山口 拓章	社会	歴史的「事実」とは何か——人面墨書土器の歴史的意味の探究——
192	2023年11月24日	清風学園 清風中学校・高等学校	清風中学校	中1	清原 淳史	数学	一次関数と方程式
193	2023年11月24日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高3	西崎 隆史	外国語	リスニング演習での反転学習・協働学習とICT端末による「間違いの言語化」
194	2023年11月24日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小6	三戸 晴加	社会	武士の世の中へ（元寇）
195	2023年11月27日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小4	大乗 香	社会	パートナーシップ制度と同性婚
196	2023年11月27日	浜田市教育委員会	浜田市立雲城小学校	小6	大達 清	社会	わたしたちのくらしと日本国憲法
197	2023年11月28日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小6	藤原 純平	社会	江戸幕府と政治の安定
198	2023年11月28日	浜田市教育委員会	浜田市立三隅小学校	小6	毛利 和真 水野むつみ	学級活動	栄養バランスを考えたお弁当を作ろう
199	2023年11月29日	飯塚市教育委員会	飯塚市立飯塚小学校	小6	池田 綾菜	国語	世界に向けて意見文を書こう
200	2023年11月29日	飯塚市教育委員会	飯塚市立飯塚小学校	小5	横手 清菜	国語	反対の立場を考えて意見文を書こう
201	2023年11月30日	クラーク記念国際高等学校	専修学校クラーク高等学院名古屋校	高2	横山 泰章	地歴	歴史総合「条約改正と日清戦争」
202	2023年11月30日	クラーク記念国際高等学校	専修学校クラーク高等学院名古屋校	高1	林 荘也	理科	生物基礎「植生・遷移のしくみ」
203	2023年11月30日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	生田 泰文 中村 達也 戸川 雅子	道徳	クラスの“空気”を見直してみよう
204	2023年12月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小5	西廣 直明	算数	三角形と四角形の面積
205	2023年12月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小6	田村 麗子	算数	資料の調べ方
206	2023年12月4日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高2	細田 昌代	国語	詩 中原中也「一つのメルヘン」
207	2023年12月4日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内河内小学校	小6	西村 美雪	算数	資料の調べ方
208	2023年12月4日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	五島 暁人	理科	天体の動きと地球の自転・公転
209	2023年12月4日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小6	山下 舞季	音楽	いろいろな和音のひびきを感じ取ろう
210	2023年12月7日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	倉敷市立精思高等学校	高4	山神 大輝	数学	曲線の接線の方程式
211	2023年12月7日	九重町教育委員会	九重町立野矢小学校	小6	江藤 浩徳	理科	てこのはたらき
212	2023年12月8日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内河内小学校	小5	飯倉 孝志	算数	三角形と四角形の面積
213	2023年12月8日	OB等	江府町立奥大山江府学園	小3	高田由佳り	国語	モチモチの木
214	2023年12月11日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小1	徳原 翔	生活	あきといっしょに
215	2023年12月12日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中3	小野 綾音	音楽	ブルタバ（モルダウ）
216	2023年12月12日	有田川町教育委員会	有田川町立藤並小学校	小2	中 雄紀	国語	わたしはおねえさん
217	2023年12月13日	有田川町教育委員会	有田川町立吉備中学校	特別支援学級	山本 寛	家庭	工夫したお弁当を作ろう
218	2023年12月14日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン6「ダニエル電池」
219	2023年12月15日	延岡市教育委員会	延岡市立東小学校	小6	宮田 諒	社会	世界に歩み出した日本
220	2023年12月15日	延岡市教育委員会	延岡市立土々呂中学校	中1	後藤 悠介	理科	音の性質（ドップラー効果）
221	2023年12月18日	宇都宮新しい学びプロジェクト	栃木県立高根沢高等学校	高2	白井 紀子	理科	免疫とさまざまな疾患
222	2023年12月19日	浜田市教育委員会	浜田市立雲城小学校	小2	真島 馨	算数	かけ算（2）九九をつくろう
223	2023年12月21日	島根県教育委員会	島根県立松江農林高等学校	高1	長谷川みゆ	農業	農業と環境
224	2024年1月11日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	生田 泰文 中村 達也 戸川 雅子	道徳	don't cry anymore
225	2024年1月12日	OB等	甘日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	単元プラン「地球と宇宙」
226	2024年1月18日	有田川町教育委員会	有田川町立御霊小学校	小6	小向 悠平	社会	新しい日本へのあゆみ
227	2024年1月18日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸内市立長船中学校	中2	土谷涼太郎	国語	モアイは語るー地球の未来ー
228	2024年1月22日	浜田市教育委員会	浜田市立第三中学校	中1	江川準之助	理科	大地の変化
229	2024年1月31日	九重町教育委員会	九重町立南山田小学校	小2	梅木 若菜	未定	未定
230	2024年1月31日	九重町教育委員会	九重町立東飯田小学校	小6	川崎 裕太	社会	アジア太平洋に広がる戦争
231	2024年1月中旬	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中1	山際 紗月	国語	少年の日の思い出
232	2024年2月5日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小3	南田早登子	音楽	いろいろな音のひびきをかんとろう
233	実施日不明	島根県教育委員会	島根県立出雲高等学校	高2	森脇 健二	数学	部分分数分解を利用した和

表9：令和5年度「新しい学びプロジェクト」に関する協調学習の公開研究授業等一覧（4/4）

(3) 今年度の成果と課題

①開発教材

本報告書巻末のDVDには、今年度の本事業での実践例のうちデータの揃っているもの80例含む、これまでの小中高での実践例3,162例について、授業案、教材、実践者の振り返りを収録している。

②授業デザイン原則

また、「新しい学びプロジェクト」教科部会では、毎年、今年度の実践における子ども達の学びのエピソードから見えてきた次の実践に向けての授業デザインの仮説（＝「授業デザイン原則」）を整理している。

教科を超えて見られる授業デザイン原則の例としては、「特に小学生の場合、『書くこと』の負荷が高いので、『書く』『話す』場面の明確な指示が必要」といったものや「子どもの学びの想定を具体的に行ったうえで、資料を焦点化したり、指示を具体的にしたり、説明に使ってほしいキーワードを示したりする」といったもののようにその場面で期待する学びの姿を明確にしたうえで、それを子ども達に明確に伝えるための工夫が目立った。

以下に各教科がまとめた授業デザイン原則のうち、教科の特性がよく表れているものを一つずつ選び、掲載する。

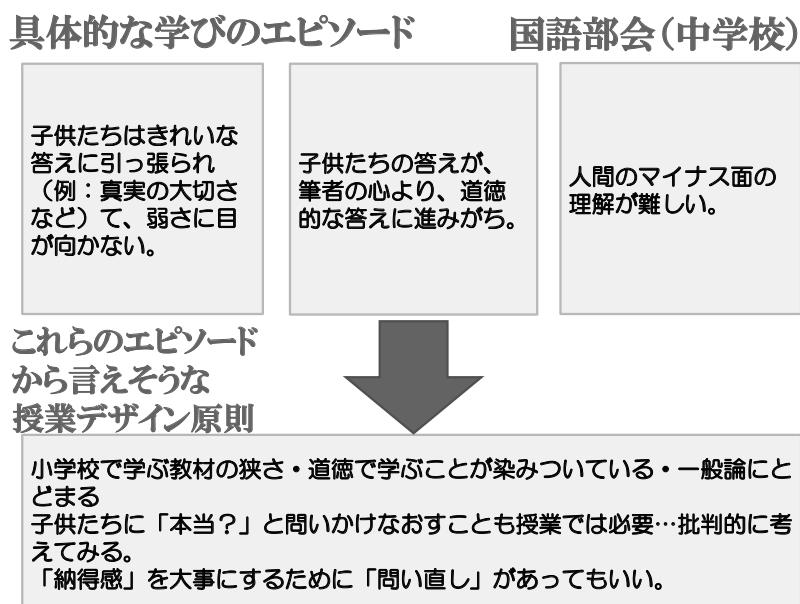


図3：令和5年度国語部会で作成した授業デザイン原則の例

中学校の国語部会では、子ども達が小学校での学習経験を通じて文学作品を道徳的に読むような読み方を身につけていがちであるという実態を基に、道徳的な読みからさらに踏み込んで読みを深めさせるための問い直しの必要性について整理している（図3）。

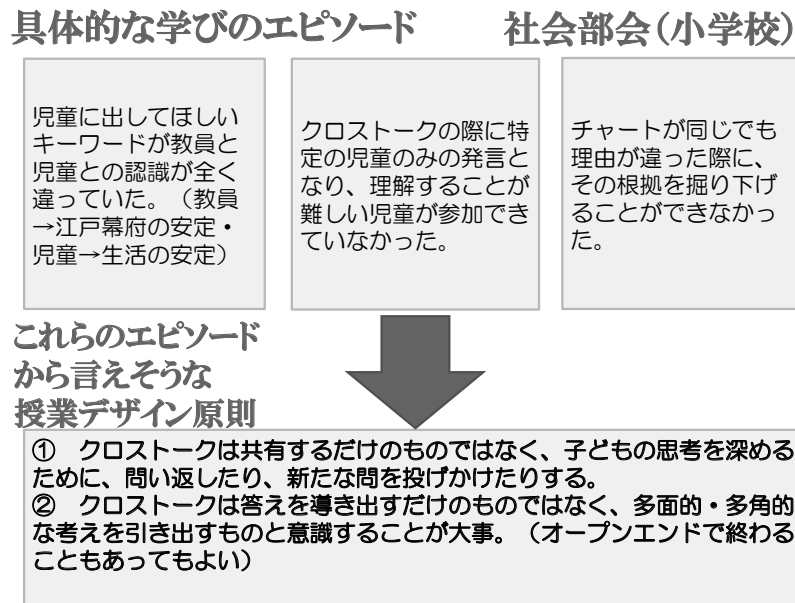


図4：令和5年度社会科部会で作成した授業デザイン原則の例

小学校の社会部会では、ねらいどおりにいかなかったクロストークでの子ども達の姿を基に、クロストークの機能とそのため教師の心構えについてまとめている(図4)。

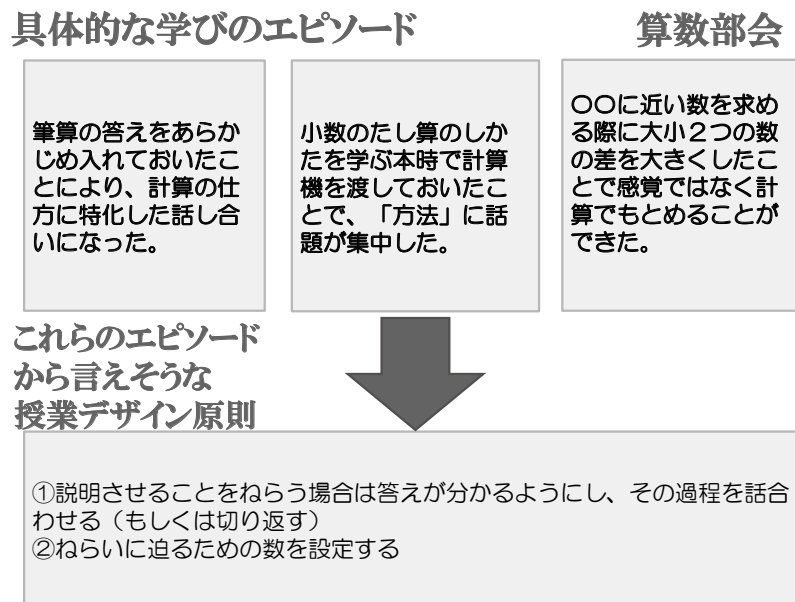


図5：令和5年度算数部会で作成した授業デザイン原則の例

算数部会では、計算に夢中になりがちな子ども達の実態を踏まえ、工夫によって(計算することではなく)説明することを主眼にした活動がうまくいった複数の例を基に、こうした場合の活動のデザイン原則を整理している(図5)。

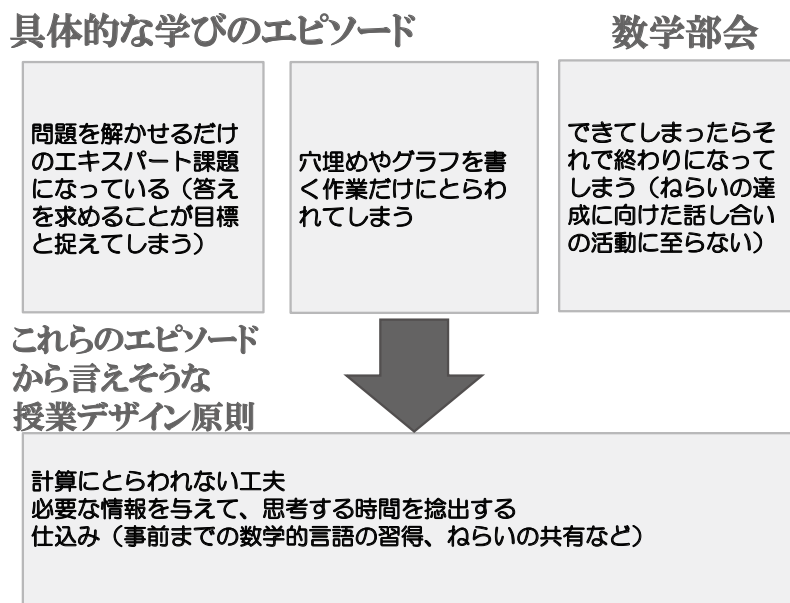


図6：令和5年度数学部会で作成した授業デザイン原則の例

数学部会でも算数部会と同じく作業や計算にとらわれがちな子ども達の実態を基に、ねらいの達成に向けた話し合いを促す工夫をまとめている（図6）。

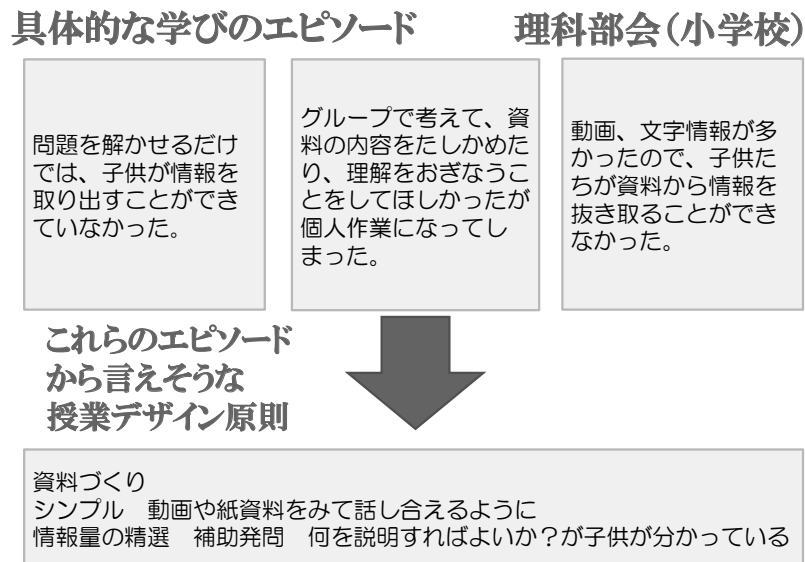


図7：令和5年度理科部会で作成した授業デザイン原則の例

小学校の理科部会では、エキスパート活動で陥りがちなつまづきの姿を基に、エキスパート資料作りのポイントを整理している（図7）。

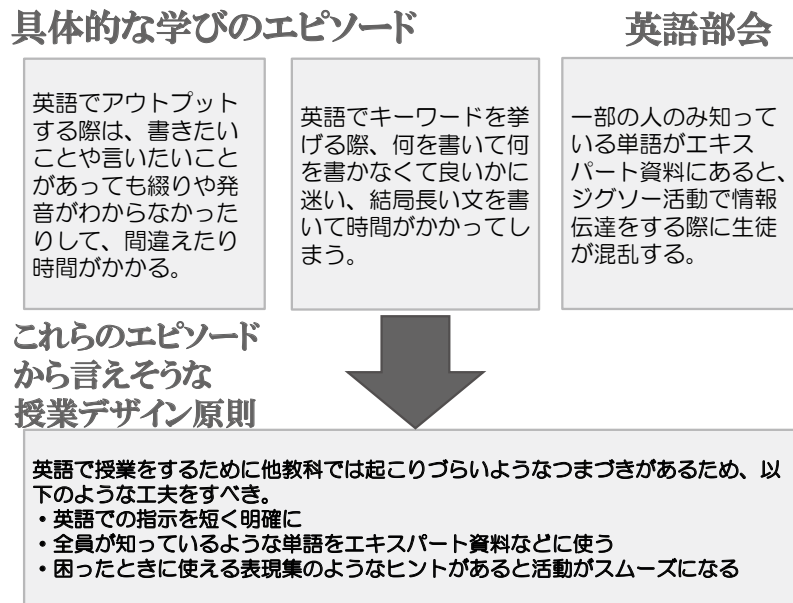


図8：令和5年度英語部会で作成した授業デザイン原則の例

英語部会では、英語でのジグソーならではのつまづきの姿を基に、本質的でない部分でのつまづきを減らすためのデザインや支援のポイントについてまとめている（図8）。

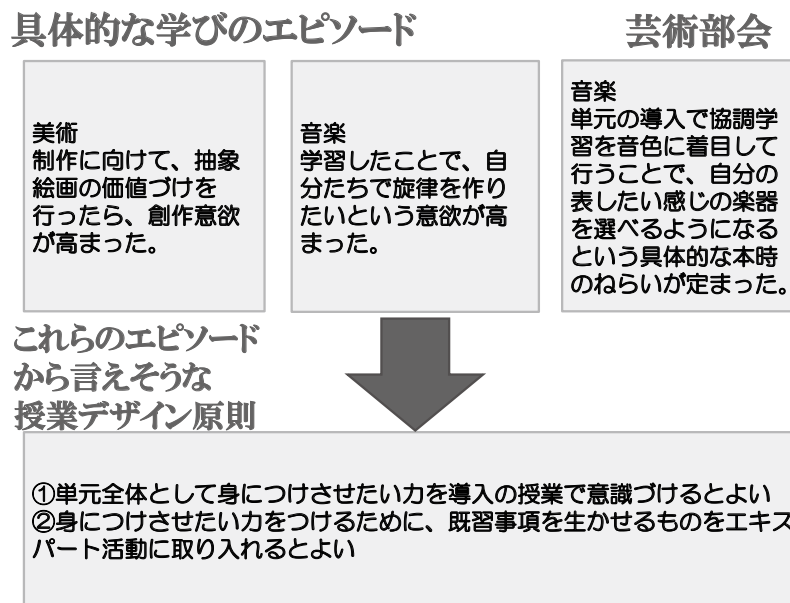


図9：令和5年度芸術部会で作成した授業デザイン原則の例

芸術部会では、ジグソー授業の後の時間の子供達の姿を基に、単元全体のデザインにおいてジグソーをどう活用できるとよいかとまとめている（図9）。

どの部会の原則も、各教科において協調学習を通じて実現したい学びとはどのようなものかという教師のねらいと、それに即して見えてくる想定外の子どもの学びの姿について

の気づきを基に、次のデザインに活かせるような仮説を整理したものとなっている。

③授業づくりのポイント

前項の授業デザイン原則も踏まえて、「教科で『知識構成型ジグソー法』を活用するときの授業づくりのポイントや使いどころ」について各教科でまとめたものを示す。

a) 国語部会

<小学校>

- 要約文を書くための準備として、筆者の考え、文章中の具体的な内容（例示）、文章構成、つかってほしい言葉を整理するエキスパートを作成すれば、要約の仕方を学ぶジグソー活動ができそう。
- エキスパートのワークシートの作り方。ジグソーでの話し合いを深めるのに、思考ツールを活用すれば相性がよさそう。（主に説明文の場合）

<中学校>

- 失敗をもとに、「やり直し」（修正・深掘り）が可能。失敗したからこそプラスに変更することもあるから、心折れないようにする。
- 納得感が得られるまでクロストークで粘る。（問いを重ねてもよい）
- 一貫したテーマを持っていることが大切。…多面的多角的に一つのテーマを見ていくことができるのがジグソーの効果的な使いどころ。

b) 社会部会

<小学校>

- 教師のねらいによって、どの活動に重きを置くのか意識するように授業をデザインする。
- 学力に関係なく、互いに認め合える活動になるしかけをつくる取組を行う。
- 理解に時間がかかる児童の視点に立って、クロストークをファシリテートする。
- 教師が主体になるのではなく、子どもが主体となる授業づくりを意識する。
- 子どもの発言をもとにして教師がファシリテートする。
- 資料を「どう読み取り、どのように読み取らせたいか」を考える。学びの想定。
- 資料を載せすぎないようにする。
- 事実を伝え合うだけのジグソー活動にならないように事実を基に話し合うようにする。
- 思考の見える化（ホワイトボードの活用やICTの活用）
- 子どもが主体的に考える課題設定（事前の学習との繋がりも考える。）

<中学校>

- ・多面的、多角的な視点での授業づくり、子供の学び視点づくりに効果的である。
- ・価値判断の必要な課題、内容において取り組ませやすい。

・多様な解や、答えのない間に対しての考え方を生徒に身に着けさせる。
 以上の内容を授業者が理解して、授業づくりをする。

c) 算数部会

<低学年>

○ジグソー活動に生かすことができるような、エキスパート活動を仕組む。(問題文や資料の内容が理解できたり、考えを深めたりするために、具体物や視覚的な支援をする。)

○ねらいに迫るために、児童の実態に合った課題や資料を精選する。(問題の量が多すぎたり、難しすぎたりすると、ねらいに迫ることができない。根拠のない話し合いになる。)

<中学年>

【ポイント】

○ねらいを明確にする

○児童の実態把握→資料の難易度を調整、グループ構成

【使いどころ】

○单元の中で一番押さえない本時

○单元が終わったときの発展

○統合・般化させたいとき

<高学年>

○対話を活発にするために、ワークシートをグループで1枚にする。(单元やねらいに応じて)

○児童が意欲的に活動できるようにするために、導入の工夫やゴールの設定をする。
 (日常と結び付けをする)

d) 数学部会

○自分一人ではたどり着きにくい“一歩先”の課題

○生徒の数学的関心を引き起こしたい内容

○生徒の疑問が表出されやすいもの

○知識・技能の機械的な習得からの再理解へ

○通常の授業では測れない生徒の資質・能力の見取り

○生徒の疑問に寄り添う、分からないを理解する

e) 理科部会

<小学校>

- 子供同士言葉でお互いに説明し合う授業では、学習理解が深まる。
- 子供目線の課題をつくる
- 教師が子供のゴールの姿を明確にして、資料づくりに取り組む
- 単元導入：単元を通して解決したい内容を考えさせる。主体的な学習
単元終末：既習事項をもとに単元学習内容のさらなる理解を深める。深い学び

<中学校>

- エキスパート資料の工夫
 - ・発展的な思考や発言を促すような資料。
 - ・実験や観察を取り入れた、生徒の実態に合わせた情報の提供
- 単元の終末
 - ・子ども達が経験・体験したことのある事象や発展的な問題へのチャレンジ
 - ・獲得した知識を活用して新たな課題を解決する（日常生活と科学とのつながり）
 - ・テストの結果を見て、定着を図りたい部分での実践

f) 英語部会

- （中学校の場合、）生徒がつまづきそうな文法項目（三単現のs、過去形、後置修飾）を使った表現活動で行うと、その後の英語学習に活かしやすい。
- （中学校の場合、）期待する解答の要素に多くのものを求めない。
- （高校の場合、）生徒の知的好奇心に見合ったものではないと授業が円滑に進まない。
- ジグソー法の授業で求める解答の要素を、授業を行うたびに少しずつ増やしていき、英語表現力を徐々に高めていくような計画が必要。
- 各Unitのまとめとしてジグソー法の授業を活用し、英語表現力が増したと生徒に達成感を味わわせることができる。
- 英語表現の活動にジグソー法の授業は使える。

g) 芸術部会

- 単元の最初に設定することで、単元全体で身につけさせたい力を意識させることができる。
- 身につけさせたい力をつけるために、既習事項を生かせるものをエキスパート活動に取り入れるとよい

④取組の状況

今年度の取組状況について令和6年1月に研究推進員等の先生方を対象にアンケートを行った（n=78）。表10は、今年度「知識構成型ジグソー法」をどんな場面で、どんな教材を使ってどの程度実践したかの平均値を示している。カッコ内は前年度（n=113）の同じ項目の数字である。「今年度新規教材として開発」の数はほぼ変化がない一方、「過去の教材をアレンジして活用」「過去の教材をそのまま活用」の数が伸び、その結果平均実践教材数が1.5倍になっている。

	今年度新規教材として開発	過去の教材をアレンジして活用	過去の教材をそのまま利用	計
研究授業で実施	0.7 (0.5)	0.6 (0.4)	0.0 (0.1)	1.3 (0.9)
研究授業以外で実施	0.8 (0.8)	1.5 (0.8)	1.5 (0.7)	3.8 (2.2)
今後実践を行う予定	0.2 (0.3)	0.4 (0.3)	0.4 (0.2)	1.1 (0.8)
計	1.7 (1.6)	2.6 (1.4)	1.9 (0.9)	6.1 (3.9)

表10：今年度の「知識構成型ジグソー法」の平均実践教材数（n=78）

	R5年度（n=74）	R4年度（n=127）	R元年度（n=117）
ほぼ毎時間	9.5%	20.5%	9.4%
半分以上	50.0%	34.6%	35.0%
月に数回程度	13.5%	25.2%	29.9%
学期に数回程度	18.9%	16.5%	24.8%
それ以外	8.1%	3.1%	0.9%

表11：子どもが主体的、対話的に学ぶ場面を取り入れた授業の実施頻度

過去の実践例が活用できる授業研究のデータベース「学譜システム」（詳細は、第2部第3章第2節参照のこと）の登録者数も令和5年1月の484名から12月には697名と約1.5倍に増加している。後のアンケート項目でも触れるように、今年度のアンケートの回答者はこれまであまりプロジェクトの授業研究に関わってこなかった方の割合が例年よりも高い。にも拘わらずこのような実践数の伸びが見られたことは、「学譜システム」の活用などもあり、以前よりもひとまず実践してみるハードルが下がってきた証左であろう。

このアンケートでは、「知識構成型ジグソー法」か否かに関わらず子どもが主体的、対話的に学ぶ場面を取り入れた授業をどのくらいの頻度で実施しているかについても尋ねている。表11に示す通り、約6割の先生方が「ほぼ毎時間」もしくは「半分以上」の授業で取り入れていると回答している。コロナ禍前の令和元年度と比べると全体として、本プ

項目	R5全体 (n=76)	R4全体 (n=113)	R5KCJ 高頻度 (n=39)	R5KCJ 低頻度 (n=37)
児童生徒の興味関心を喚起するような内容を扱う	53.9%	38.1%	51.3%	56.8%
教科のねらいやつけたい資質・能力を意識して課題を設定する	51.3%	53.1%	59.0%	43.2%
具体的な児童生徒の解答を想定しながら教材を見直す	47.4%	50.4%	53.8%	40.5%
児童生徒の実態に即して課題や資料等の難易度を調整する	46.1%	39.8%	46.2%	45.9%
指導方法を工夫する（例：ジグソー法のアレンジや他の指導法との融合など）	34.2%	24.8%	38.5%	29.7%
3つのエキスパートに分けやすい内容を見つける	26.3%	27.4%	17.9%	35.1%
児童生徒が課題や活動の流れをきちんと把握できるようにする	26.3%	28.3%	28.2%	24.3%
児童生徒が話しやすいグルーピングを心がける	25.0%	23.9%	30.8%	18.9%
ICTを効果的に活用する	23.7%	25.7%	25.6%	21.6%
なるべく普段遣いできるような授業の進め方を提案する	22.4%	23.9%	20.5%	24.3%
本時と前後の学習との効果的なつながりを意識する	17.1%	23.0%	15.4%	18.9%
過去の授業研究での気づきや仮説を生かして授業づくりを行う	13.2%	19.5%	17.9%	8.1%
他の先生方の意見や視点を取り入れながら授業づくりを行う	13.2%	27.4%	12.8%	13.5%
決まった答えがなくどんな解答がでてきてもよいような課題を設定する	10.5%	13.3%	12.8%	8.1%
児童生徒の学習を見とるための評価の規準を具体的に設定する	9.2%	12.4%	7.7%	10.8%
設定した授業時間内に一連の学習活動が収まるように内容や時間を調整する	7.9%	9.7%	7.7%	8.1%
これまであまり実践例がない内容や分野に取り組む	6.6%	14.2%	7.7%	5.4%

表12：「知識構成型ジグソー法」を用いて研究授業を行う際に特に意識しているポイント（％）

プロジェクトに参加する先生方が「知識構成型ジグソー法」に限らず幅広く子どもが主体的、対話的に学ぶ場面を取り入れた授業が常識化しつつある状況が見て取れる。他方、上述のとおりこれまであまりプロジェクトの授業研究に関わってこなかった回答者の割合も高く、その分、「それ以外」の回答割合も過去に比べて高くなっている。

⑤授業づくりに関する考え方

またこのアンケートでは、「知識構成型ジグソー法」を用いて研究授業を行う際に、特に意識しているポイントを表12の17項目から最大5項目選択する形で回答してもらった。

表13では、今年度と昨年度の全体の回答割合の比較、今年度の「知識構成型ジグソー法」授業の実施頻度（以下、「KCJ頻度」。3教材以上を「高頻度」（n=39）、未滿を「低頻度」（n=37）と分類）別の回答割合の比較を示している。項目は今年度回答割合が高かった順に並べている。また、それぞれ比較対象と比べて10%以上回答割合が高い項目の回答

率には色を付けた。

今年度と昨年度を比べて最も回答割合が上がったのは全体1位の「児童生徒の興味関心を喚起するような内容を扱う」である。特にKCJ低頻度群で回答割合が高いが、高頻度群の回答割合も昨年度の全体平均より高い。この項目は昨年度、一昨年度と比べ10%以上回答割合が下がった項目だったが、回答者層の変化もあり改めて人気を回復した形である。

逆に今年度と昨年度を比べて最も回答割合が下がったのは、全体14位の「他の先生方の意見や視点を取り入れながら授業づくりを行う」である。授業研究の視点から言うと残念な結果ではあるが、表10の実践数の増加とあわせて考えると、ジグソーの授業づくりが日常化してきているためだとも言えるかもしれない。

KCJ低頻度群と比べてKCJ高頻度群の先生方が選ぶ傾向が強かったのが「教科のねらいやつけたい資質・能力を意識して課題を設定する」、「具体的な児童生徒の解答を想定しながら教材を見直す」、「児童生徒が話しやすいグルーピングを心がける」である。特に前二者については全体としても上位であり、これまでも特にKCJ高頻度群の先生方が選ぶ傾向の強い項目である。「知識構成型ジグソー法」を用いた授業づくりで特に大事にできるとよい点であると言えるだろう。逆に「3つのエキスパートに分けやすい内容を見つける」については、KCJ高頻度群と比べてKCJ低頻度群の先生方が選ぶ傾向が例年強く、実践を重ねるうちにあまり意識されなくなってくるポイントであると言えそうである。

⑥授業研究スタイルの広まりと課題

アンケートでは、あわせて「新しい学びプロジェクト」で近年力を入れている授業研究の取組、子どもの学びのシミュレーションによる事前検討及び仮説検証型の授業研究（内容については、それぞれ第2部第3章第3節及び第4章第1節を参照のこと）の活用状況及びその手ごたえや課題について聞いた。活用状況は表13のとおりである。カッコ内は前年度（n=113）の同じ項目の数字である。

前述の通り、アンケート回答者層の変化もあり、今年度は前年度と比べてこれらの取組にまだ触れていない先生方の回答割合が高かった。

こうした授業研究に取り組んでくださっている学校の先生方からは、「子どもの学びの事実をもとに研究授業ができるところが一番の特徴だと感じる。研究授業でよくあるのが、理論の空中戦になることや、教科が違うという理由で議論や研究主題につながっていかないことが多々ある。研究授業の前に、実際に子どもと同じように学びを体験、想定してみ、それらをもとに授業をみんなで作り上げて、実際に参観してみて、自分たちの予想とどう違ったのかを検証し、さらに授業をより良くしていくことがとても効果的である。また、授業者以外の先生も研究授業に対して前向きに向き合えることも利点だと思う」など、具体的なよさを語っていただいている。

その一方で課題だと感じることを伺うとやはり多いのは事前検討の時間の確保である。これに対しては、「メーリングリストやICT、（注：学年団などの）グループによる研究

授業研究の手法 (%)	「子どもの学びのシミュレーション」による事前検討	「仮説検証型授業研究」による研究協議
1. 聞いたことがない	26.4 (8.0)	16.9 (4.4)
2. 聞いたことはあるが経験したことはない	8.3 (8.8)	8.5 (8.0)
3. 研修等で経験したことはあるが自校で行ったことはない	8.3 (15.9)	9.9 (14.2)
4. 自校で行ったことがある	37.5 (40.7)	45.1 (45.1)
5. 自分が進行役になって自校等で行ったことがある	19.4 (23.9)	19.7 (26.5)

表 13：授業研究の手法の活用状況 (n=72)

授業の実施など工夫することで、効率的で効果的な授業研を実施していければよい。グループによる研究授業では、研修のファシリテート役が方向性を理解しておくことがとても大切になってくると思います」といったご提案もあった。

授業研究の目的は、個々の教材、授業のブラッシュアップ以上に、授業研究を通じて先生方が子どもの学び方、つまずき方について学び、授業デザインや見とりの力量を高めていくところにあるはずである。そうした目的意識をしっかりと定めたい。各学校の一年間の研修計画について、どうすれば効果的、効率的に先生方同士が子どもの学びの事実を基に学びあい、授業デザインや見とりの力量を高めていくことができるのかという視点から年間の計画をデザインしたい。年間計画の中では、授業研究の視点や方法を身につけるために学校全体でフルセットの「子どもの学びのシミュレーション」による事前検討や「仮説検証型授業研究」による研究協議を行う会もあれば、学年団などのグループの先生方でよりカジュアルにこうした取組を行う会もあってよいだろうし、(授業研究の視点が先生方の中で定着してきたら)例えば、研修主任等を中心に2-3名の先生方が学譜システムを使って既存教材を使った授業での子どもの学びについて30分程度対話しながらイメージを固めていくような事前検討でも十分効果的に機能しうるだろう。先生方の実態やそれぞれの学校の状況にあわせて弾力的に取り組みを進めていけるとよい。

⑦授業研究を通じた若手の先生方の成長

こうした授業研究を通じた若手の先生方の成長について知るために、今年度は何名かの先生方のご協力をいただき、期初、期末で授業づくりについて二度のインタビューを行った。ここで3名の先生方の授業づくりについての考え(質問項目は「授業をつくる時、気を付けていること」)の変容を提示したい(表14)。

1番の先生は、正採用3年目の小学校の男性教諭である。3年前から協調学習の授業研究に取り組む学校に勤務し、今年度初めて大きな研究授業の授業者を経験した。期初にお

No	期初	期末
1	子どもたちが話をする場面をどの教科でも入れようと思っている。教師が話すだけだと飽きるし、子どもたちどうして話し合うことによって、1人ひとりの考えを強化する。わからなかった子も「そういうことか」となるので。発表するときの自信につながる意図もある。	子どもがどう感じ取るかを重視しないと。自分がこう教えようと思っても子どもの捉え方は違う。今日もそうだった。いろんな問い方を考えて、一人一人に合わせた聞き方をしないと。
2	課題に対してのまとめを達成できるようにすること、導入でめあてを子ども達から出せるようにすること、まとめも自分たちで書けるように、書きだしを与えたりすること。	私が不安で資料を丁寧に書きすぎているのをあえて（資料に）空きをつくってみることで対話が生まれる、そういう仕掛けづくりを次も考えられたら楽しい。教師がわくわくして授業しないと。（中略）自分にゆとりができると子ども達も気持ちに余裕がでて、いろんな意見がでてくるかも。そう思うと楽しみになってきた。
3	算数の場合、子どもに身近なこと、生活におちやすいことを意識するようになった。	子どもがどういう風に考えるかを予想する力が自分はすごく弱いので、するからにはどうやって考えるか、こう思考するんじゃないかという流れをすごく考えるようになった。今後もそこはしっかり大事にしていきたい。予想は教材づくりにダイレクトに反映してくれる。子どもたちのつまずきを予想して、その対策をすることは、最近すごく楽しくなってきた。

表14：若手インタビュー「授業をつくるとき、気を付けていること」

話を伺った際も「子どもたちが話をする場面をどの教科でも入れよう」と対話活動の重要性は意識していたが、期末（ご自身の研究授業の後）にお話を伺うと「子どもがどう感じ取るかを重視しないと」、「いろんな問い方を考えて、一人一人に合わせた聞き方をしないと」と、単に対話活動を取り入れるだけでなく、その日の授業での子どもの学びの事実を基に、教師が提示したつもりの課題と子どもが把握している課題が違うかもしれないことを自覚して、子どもの捉え方を想定しながら問い方を考える必要性について言及する変化が見られた。

2番の先生は、正採用5年目の小学校の女性教諭である。今年度協調学習の授業研究を始めた学校に勤務し、自身も研究授業の授業者を務め、また他の先生の研究授業にも参加

している。期初（ご自身の研究授業の直後）にお話を伺った際は、導入やまとめを円滑に行えることを重視していたが、そこからさらに同じ若手の先生の研究授業を経て行った期末のインタビューでは、「私が不安で資料を丁寧に書きすぎていた」ことに気づき、当日の別の若手の先生の研究授業で参加者から出たアイデアを基に「あえて（資料に）空きをつくってみることで対話が生まれる、そういう仕掛けづくりを次も考えられたら楽しい」と語るとともに、「自分にゆとりができると子ども達も気持ちに余裕がでて、いろんな意見がでてくるかも。そう思うと楽しみになってきた」と新しい授業づくりに前向きな発言も飛び出した。

3番目の先生は、正採用3年目の小学校の女性教諭である。以前から協調学習の研究に取り組み学校に勤務し、今年度初めて大きな研究授業の授業者を経験した。期初（ご自身の研究授業の直後）にお話を伺った際にも「子どもに身近なこと、生活におちやすいこと」と子ども目線の授業づくりを意識していたが、そこからいくつかの研究研究会を経た期末には子ども達が「どうやって考えるか、こう思考するんじゃないかという流れをすごく考えるようになった」、「子どもたちのつまずきを予想して、その対策をすることは、最近すごく楽しくなってきた」と、より具体的に学びの過程を想定する重要性と楽しさに気づいている。

3名の先生方のインタビューからは、1年に満たない期間での授業づくりに関する考えの大きな変容が伺える。他方、1番の先生や3番の先生は過去2年間も協調学習の研究には関わっているが、3年目の1年間で大きな変容が見られた例だと言える。例えば、1番の先生については、昨年度（2年目）の様子として、授業研究会で他の先生方が子ども目線の議論をする中、ひとり先生目線で指導技術についての質問をしていた姿が印象に残っている。誰もが1年授業研究に関われば大きな変化があると言うより、継続的に研究に関わる中で何かのタイミングで子どもや授業の見方が変わるということがあると言った方がよいだろう。またその際、ご自身が研究授業の授業者を務めることもその変化のきっかけにはなっていそうだが、2番や3番の先生方の変容を見ると、自身の研究授業の直後よりもその後で他の先生方の授業研究会に参加することで、考えが整理されてくるということもありそうである。実際、3番の先生はインタビューの最後に、「（別の若手の先生の研究授業についての）今日の協議の話を聞きながら、前回自分のときに指摘いただいたことが改めて腑に落ちた」と語っている。今回示したような先生方の変容を支えるために、若手の先生が授業者や主体的な参観者の立場を歩き来しながら、授業づくりについての考えを深めていけるような継続的な授業研究の場のデザインが求められる。

⑧マネジメントの視点から

授業研究の自走を支え、プロジェクトの質的深化と量的拡大を実現するために、教育行政や管理職といったマネジメントの視点からはどんな成果と課題が見えていて、また今後どんな取組が可能なのか。今年度も引き続き2回の連絡協議会及び教育長・担当者会議で協議を行っている。

今年度お話のあった取組として、例えば、先生方の研究チームをどう組織するかという点に関しては、マイスター教員を若手のチューターとして活用する（鳥根県）、若手の先生方がのびのびと授業づくりができるように若手研をつくる（京都市立西院小学校）、1学年1クラスの小規模校同士が連携して、学校間で同学年チームを作って授業のブラッシュアップをするグループをつくる（安芸太田町）といった試みが報告された。また小規模校の子どもや先生方が協調学習の授業を体験するための合同オンライン授業（豊後高田市、九重町、延岡市）の試みも引き続き発展している。さらに今年度は新たに、保護者に協調学習の授業を実際に体験してもらうことでよさを実感してもらうことを通じて、自治体や学校が目指す教育の在り方や学びのゴールについて地域や保護者にも理解を広げる試み（安芸太田町）についても報告があった。特に最後の点については、「学力テストの点がとれるのか」という地域や保護者の素直な疑問とどう対話し、どのように目指す学びを地域として支えていってもらえるのか、コミュニティの中の新しい学校の在り方を問い直す意味でも重要な試みであると言えるし、プロジェクトの目指す授業づくりを一過性のものにならないためにも正面から向き合う必要のある課題であると言える。

（4）今後に向けて

今年度、特に授業研究を通じた若手の先生方の成長にフォーカスをあてる中で、改めてこれまでのプロジェクトの授業研究の取組に確信を持つことができた。

他方、もちろん「子どもの学びのシミュレーション」や「仮説検証型授業研究」は、あくまで学びの過程に焦点化した授業研究を支える一つの具体的な方法に過ぎない。授業研究の視点や学びの見方が先生方の手に馴染んできたなら、それぞれの学校の状況にあわせて弾力的に取り組みを進めていけるとよい。そのためにも研究主任や管理職等の授業研究のマネジメント、ファシリテーションを行う先生方が、授業研究における先生方の学びの事実に基づき、次の取組をデザインしていくような「授業研究の授業研究」の視点を意識できるとよいし、学校を超えてそうした課題に取り組む先生方の対話の場も設けていきたい。

またプロジェクトの深化に伴い、先生方の射程が一つの授業づくりからより長いスパンでの子どもの成長や学びのゴールに向かっていることも感じている。そうしたゴールに向けた学校全体の取組をどうデザインしていくか、小中そして高も含む9年、12年のスパンでの教育の在り方をどうデザインしていくか、それに地域や保護者をどう巻き込んでいくかといった次のレベルの課題についての対話もより多くの方を巻き込んで行えるとよい。そのためにもプロジェクトとして、特に各参加団体の教育長により積極的にコミットしていただけるような場づくりを模索していきたい。

3. 未来を拓く「学び」プロジェクト

(1) 連携事業の概要

埼玉県教育委員会では、CoREFとの連携による「知識構成型ジグソー法」を活用した協調学習の授業づくりを柱の一つに、生徒の主体的な学びを引き出す継続的な授業改善を行う研究連携事業を平成22年度から継続してきた。平成22、23年度は「県立高校学力向上基盤形成事業」、平成24～26年度は「未来を拓く『学び』推進事業」、そして平成27年度からは「未来を拓く『学び』プロジェクト」を開始し、令和2年度からは、さらに「主体的・対話的で深い学び」を実現するための取組を行い、進化と深化による新しい学びによる授業改善をめざしている。令和4年度からは、年限を限った特別な事業ではなく、県立学校の恒常的な授業改善のための取組として位置づけられるようになった。

研究連携の中心的活動は、「知識構成型ジグソー法」による教材の開発、授業実践、実践の振り返りである。研究の具体的な進め方としては、研究連携に参加を希望する学校(研究開発校)を県内の公立高等学校及び県立中学校から募り、各研究開発校が校内で中核的に研究を進める教員(研究開発員)を申請する。研究開発員は教科等の部会に組織され、対面とネット上のやり取りによって、協力して教材開発と実践、効果検証を行う。

研究推進の進行管理及び連絡調整は、埼玉県教育局県立学校部高校教育指導課及び県立総合教育センターがリードし、CoREFはこれらと協力しながら、協調学習の理解を深めるためのワークショップのデザインや教材開発の支援、授業実践評価など、研究推進上の様々なサポートを行う。また、埼玉県教育委員会からCoREFにマイスター認定教員(後述)1名が派遣され、協力研究員として研究連携のコーディネートを行っている。

①事業規模の推移

14年間の研究連携における事業規模の推移を図10に示す。

研究連携がスタートした平成22年度には、研究開発校が県立高校の約7%にあたる10校であったものが、今年度は全ての県立高校137校に加えて市立高校2校の139校に拡大している。

また、今年度の研究開発員数は438名であり、1校あたり平均3.2名の研究開発員が登録されている。

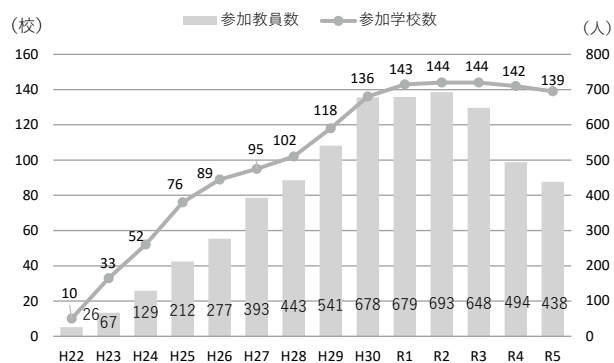


図10：研究開発校及び研究開発員数の推移

②事業の目的

本事業の目的を表15に示す。本事業は、協調学習の授業づくりに関する埼玉県の取組の結実期として位置づけられ、これまで取り組んできた「知識構成型ジグソー法」による協調学習の授業づくりをより広いアクティブ・ラーニングの文脈から捉えなおし、協調学

習の授業を特別なものではなく日常化することを射程にデザインされている。そのため、事業の目的としては、学びの評価についての研究に一層注力すること、「協調学習」の授業づくりを軸とした教員同士の学びのネットワーク形成を一層意識的に行うことが掲げられている。

未来を拓く「学び」プロジェクトの事業目的・事業内容
<p>1 事業の目的 協調学習による授業づくりを中心とする主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善に取り組む。</p> <p>2 事業の内容</p> <p>(1) 県教育委員会は、県内各高等学校から研究開発員を募集する。研究開発員は、上記事業の目的の達成を通じて、生徒の資質・能力を向上させる。</p> <p>(2) 研究開発員は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、教員ネットワークによる協働的活動を取り入れ、授業や教材の研究及び実践を行う。併せて、これらの振返りを通じて授業改善に取り組む。</p> <p>(3) 県教育委員会は、教科部会ミーティング及び公開授業・研究授業を主催する。また、専用ウェブサイト（以下「情報交換サイト」という）を運営する。</p> <p>(4) 本事業の目的を達成するため、一般社団法人教育環境デザイン研究所 CoREF プロジェクト推進部門（以下「CoREF」という）等、専門の知見を有する機関と連携して取り組む。</p>

表 15：「未来を拓く『学び』プロジェクト」の事業目的・事業内容

③未来を拓く「学び」プロジェクトを中心とした事業展開

埼玉県と CoREF との研究連携は、本事業に留まらず、多角的な事業展開とそれらを有機的に組み合わせた教員の学びのシステムづくりを行ってきた。その展開を図 11 に示す。

平成 22 年度に「知識構成型ジグソー法」を用いた協調学習の授業づくり研究連携がスタートし、平成 24 年度には、授業力向上研修として、その成果を生かした初任者研修がスタートした（詳細は、第 2 章第 4 節参照）。授業力向上研修の講師は、CoREF とともに、研究開発員や各教科部会を運営する指導主事が務めている。初任者研修による県内高等学校への全面展開に伴って、各学校管理職や教育行政関係者にビジョンの共有を行うための管理職研修が平成 25 年度にスタートした。平成 28 年度からは、悉皆の新任校長、教頭研修にも協調学習の授業改善支援が組み込まれた。

また、平成 26 年度には、研究連携に携わる実践者の中からさらに中心的な役割を果たす教員を対象に月 1 回のワークショップ型の研修を 1 年間行う協調学習マイスター研修がスタートした。このマイスター研修は、次節で扱う CoREF の「本郷学習科学セミナー」を活用したものであり、他県から同様のねらいで参加する多様な校種・教科の実践者や研究者と共に意見交換や実践検討を行うことが可能になっている。

埼玉県協同学習マイスター認定教員（以下、マイスター教員）は今年度当初70名であり、「知識構成型ジグソー法」による協同学習に基づく授業改善を推進している。さらに、協同学習の実践が浅い教員へ公開授業の実施や県内の研修会講師等を務めるほか、県外で協同学習の授業づくりに取り組む学校に出前授業を行うなどその活躍の場を広げている。

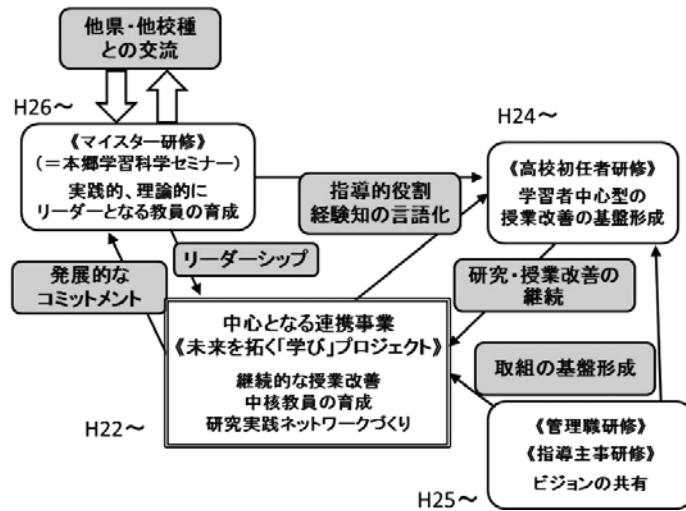


図 11：埼玉県高等学校における協同学習関連事業の展開

14年間という流れの中で、研究開発員が指導主事や管理職に就き次代の教員の育成を支える例も増えてきた。多角的な事業展開と教員の学びのシステムづくりによって、埼玉県における協同学習の授業づくりの取組は、単に新しい授業手法の研究開発に留まらず、「知識構成型ジグソー法」を使った協同学習の授業づくりという1つの取組を核に、大学やその先の社会で求められる資質・能力の育成に向けて、県内の先生方が高等学校における学びの変革を考える1つの基盤を形成してきたと言える。

(2) 今年度の事業の報告

続いて、今年度の「未来を拓く『学び』プロジェクト」の実施状況について報告する。

①今年度の研究開発員

今年度の教科部会別の研究開発員数は表16のとおりである。

なお、研究開発員438名のうち、96名(21.9%)が昨年度初任者研修で協同学習を学んだ受講者である。これは初任者研修受講者全体の約32.5%にあたる。また、今年度研究開発員の334名(76.3%)が、平成24年度以降の授業力向上研修の受講者である。協同学習関連事業を有機的に展開することによって、初任者の段階から授業改善に前向きな教員を後押しし、教員経験年数に関わらず授業改善の中核にまで育て上げるシステムが機能していると言える。

国語	地理歴史	公民	数学	理科	保健体育	音楽	美術工芸	書道	外国語	家庭	情報	農業	工業	商業	看護	福祉
74	55	15	71	48	33	6	4	5	65	6	11	5	16	16	4	4

表 16：令和 5 年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」教科部会別研究開発員数一覧（438 名）

②今年度のスケジュール

今年度の事業の主なスケジュールと概要を表 17 に示す。

日程	イベント・会場	概要
4 月 24 日	指導主事対象 説明会 (埼玉県立総合 教育センター)	重点研究授業を中心とした教科部会運営の全体的なイメージをつかみ、各教科部会で足並みを揃えた運営を行うために、事前研究・授業観察・事後研究の一連の流れを体験し、目的の共有を図った。
6 月 28 日	公開授業	マイスター教員による、これから協調学習に本格的に取り組もうとする教員等を対象とした「知識構成型ジグソー法」の授業を 3 会場、計 5 教科で実施した。当日は事前協議・授業参観・事後協議を、他教科の先生なども含めて対面で行った。
6 月～7 月	第 1 回 教科部会 (オンライン)	各教科でプロジェクトのビジョン・目的を確認し、そのための年間取組を共有する機会とする。ねらいを十分理解した上で、そのために何ができるのか意見交換を行い、今年度の進め方について確認を行った。
8 月 29 日 8 月 30 日	第 2 回 教科部会 (オンライン)	全教科合同で開催し、教材検討や教科等横断的な取組の実践報告など、研究開発員自身が興味関心のあるテーマを選択し協議・報告を行った。
(2 学期)	事前教材検討 (オンライン)	各教科で公開授業実施に向けた教材検討をオンラインで行った。
(2 学期)	公開授業	12 教科で公開授業を実施した。当日は事前協議・授業参観・事後協議を、他教科の先生方なども含めて対面で行った。
(3 学期)	第 3 回 教科部会 (オンライン)	今年度の活動について振り返り、公開研究授業やその他の授業実践から見てきたことを交流し、次年度の研究の進め方について話し合った。

表 17：令和 5 年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」年間スケジュール

事業の性質変更に伴い、オンラインを活用し、かつ教科ごとに研究開発員の都合にあわせた柔軟なスケジュールリングを行いながら取組を進めた。今年度は新たに1学期にマイスター教員によるこれから協調学習に本格的に取り組もうとする教員を対象にした公開授業を設定するなど、学びの機会の充実を図った。こうした取組は次年度以降もより組織的に行っていききたい。

(3) 今年度の研究推進

①開発教材

今年度全体で12教科の公開研究授業を定め、オンラインでの事前教材検討及び対面による授業参観・事前事後協議を行うことを中心とした研究となった。

本報告書巻末のDVDには、今年度の本事業実践のうち公開授業12例、その他35例の47例を含む本事業を中心とした高等学校での実践2,105例について、授業案、教材、授業者の振り返りをPDFファイルで収録している。ご活用いただきたい。

②公開研究授業

授業実施の前に行う教材検討や授業デザインの検討はオンラインを活用し、実際の授業見学や研究協議は対面で行うこととして、12教科について公開研究授業を実施した。

(1) 目的

協調学習による授業づくりを中心とする主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善に取り組む。併せて、生徒の学びを直接見とるとともに、事後の協議を通じて、評価改善の一助とする。

(2) 実施時期 10月中旬から12月中旬まで

(3) 実施教科 12教科

・国語 ・地理歴史 ・公民 ・理科 ・保健体育 ・芸術
・外国語 ・家庭 ・情報 ・農業 ・工業 ・商業

(4) その他

各学校において、教科等横断的な視点で授業改善に取り組むことができるよう、他の教科にも参加することができる。

公開研究授業は、仮説検証型授業研究のスタイルで行い、そのファシリテーションは本事業の事務局担当指導主事、又は埼玉県からCoREFに派遣されているマイスター教員、CoREFスタッフが行った。公開研究授業にあたっては、図12、13のように、研究授業の目的と進め方を図に整理し、周知した。授業参観の前に参加者に本時の課題について考えてもらう時間をとることで、参加者が期待する学習の姿やつまずきのイメージをもって授業を参観し、生徒の学びの事実に基づいて協議することができた。

他方、公開授業の日程の決定が直前になることもあったため、当日の参加者が少ないこともあった。早い段階から日程の調整を行うとともに、学校外からの研究開発員の参加だ

けでなく、教科を超えた校内の先生方の参加も促し、より組織的な授業改善につながる取組にしていくことも次年度以降の課題である。

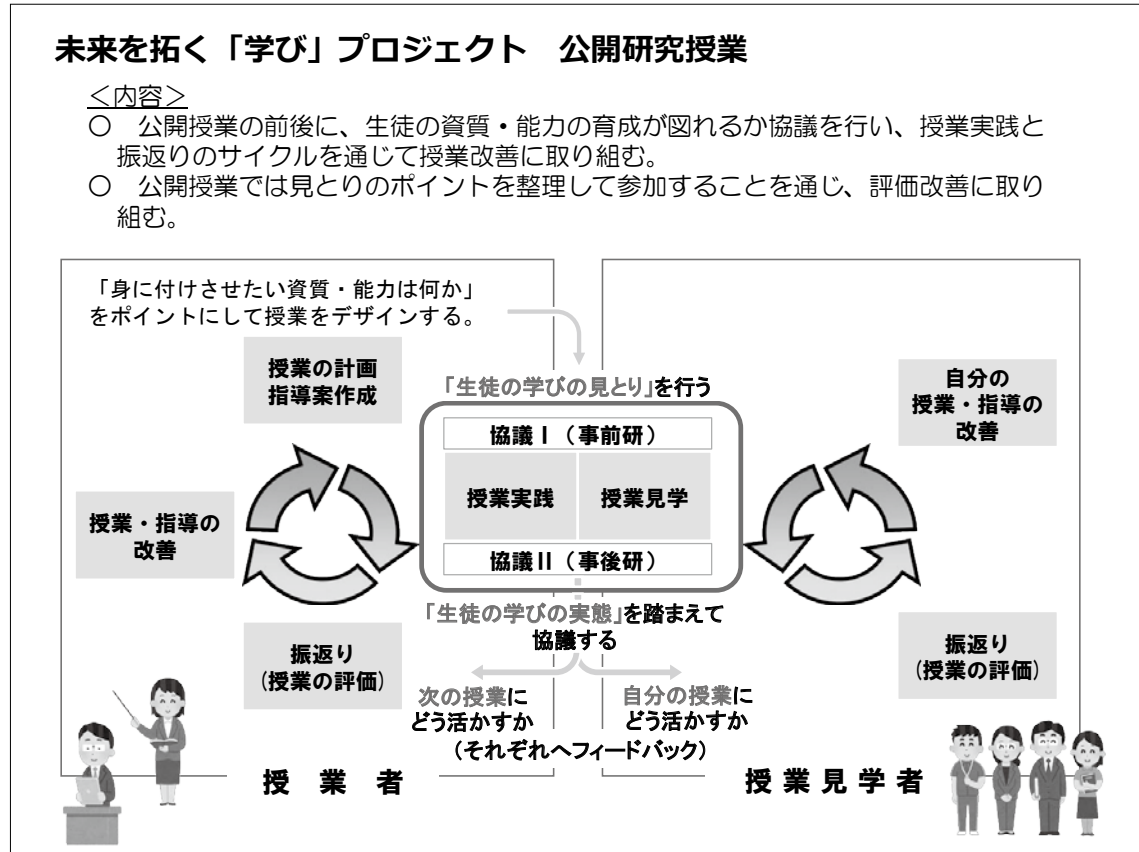



図 12：未来を拓く「学び」プロジェクト 公開研究授業のねらい

公開授業の流れ<実施日>

(1) 事前研 (20分)

授業見学者は本時で行う教材を見て、問題に実際に解答する。

このとき、答えが1行、2行であったり、単語であるなど、色々出てくるのは生徒も同じ。授業を通じて生徒がどう変容していくのかを、授業で見とる。



(2) 公開授業 (1コマ)

協調学習「知識構成型ジグソー法」による授業実践を行う。

授業見学者は『授業のみかた』を踏まえて、想定していたことや、つまづいていた点など、生徒の学びの実際を見とる。

「知識構成型ジグソー法」による授業のみかた

- 生徒が自分の考えを変えていく様子を追う
- 生徒の具体的な発言や記述に着目する
- 自分なりに授業の内容を理解したり生徒の学習の様子を予想したりしたうえで生徒の様子を観察する

(3) 事後研 (70分)

協議1「授業者の事前の期待や想定と比べて、子どもの学びの様子について見えてきたこと」

※ 事前に想定したことと生徒の実際の学びを比べ、気づいた点を協議する

協議2「子どもの学びの様子を根拠にして、よりねらいに向けた学びを引き起こすために授業デザインや支援の工夫として考えられること」

※ 協議1で挙げられた子どもの学びの姿を根拠にして協議する

<実施日の前日まで>

授業者は、情報交換サイトに授業案等を投稿して、他校の教員と意見や情報の交換を行うことができる。

または、オンラインミーティング等で直接対話し、授業案のブラッシュアップを行う。










図13：未来を拓く「学び」プロジェクト 公開研究授業の流れ

③公開研究授業を核とした教科部会の研究推進

続いて、公開研究授業を核とした教科部会の研究推進の具体的な様子について、家庭部会を例に紹介する。研究推進は、公開研究授業以外すべて放課後の時間を利用した遠隔同期での教科部会とプロジェクトの専用サイトを活用した掲示板でのやり取りで行っている。

a) 第1回教科部会

今年度の家庭部会の取組は、第1回教科部会から始まった(7月3日(月);遠隔同期)。自己紹介をはさみながら今年度の活動計画や情報交換サイトの活用方法についてなどの確認を行い、後半では、今までの実践の紹介や、そこから見えてきた教材づくりのポイント、生徒の変容、「知識構成型ジグソー法」の授業をしてよかったことなどを共有した。また、特に専門学科では実習科目が多いためここで「知識構成型ジグソー法」の授業を実践できるか、一人一台端末をどう効果的に活用できるかなど課題や悩みについて共有と意見交換を行った。

その後、今年度の公開研究授業を、川越総合高校の川澄美夏教諭による高校1年生「家庭基礎」と決定した。

b) 公開授業の事前検討過程

川澄教諭の授業案についての最初の検討はオンラインでの教科部会で行った(11月1

日（水）；遠隔同期）。授業デザイン（第一案）の概要は表 18 の通りである。

課題 (概略)	「自分にも地球にも健康的な食生活をめざして」自分の『チェックリスト』の結果をもとに、自分の食生活の中で工夫・改善できることを、「〇〇を～する」または「～しない」の形で、あるだけあげましょう。
Exp A	『流通する食品と栄養』 新型栄養失調（糖質・脂質過多、たんぱく質不足や野菜自体の栄養素が少ないこと）と加工食品の文章を読みながら、自身の日常の食生活と地球の環境面についての問題点と改善点を考える。
Exp B	『動物性・植物性食品』 畜産が環境に与える影響とウォーターフットプリントの表から水不足の課題、動物性・植物性たんぱく質についての文章を読みながら、自身の日常の食生活と地球の環境面についての問題点と改善点を考える。
Exp C	『自然と産物と食生活』 身土不二と一物全体の食の 2 大原則の理念と森林破壊とプランテーションの問題についての文章を読みながら、自身の日常の食生活と地球の環境面についての問題点と改善点を考える。
期待する解答の要素	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食品の種類が多様多様であるからこそ、正しく選択できる力の重要性を確認する。 ・ 自らの食卓から見えないところに存在する様々な負荷を知り、日頃より想像できる。 ・ トレードオフの上で、自分に適した食行動のためにすぐにできることを見出す。 ・ 短期的・長期的視点を併せ持ち、多義的に充実した食生活を実践しようとする

表 18：公開授業（川澄教諭）デザインの概要（第一案）

川澄教諭から授業のねらいなどを説明した後、主に現在の教材で授業者のねらいや期待する生徒の姿が実現できそうかについて協議を行った。協議では「かなり盛りだくさんな内容で、1時間の中で実施できるのか」といった意見があったが、川澄教諭からは「資料の内容はあえて増やしている。どこに着目するかを見たいので、結論は多様になっていい。一番大事にしたいのは『自分事にする』という部分」という授業者のねらいの説明があった。このねらいと現在の教材から予想される生徒の学習過程とを比較して、「生徒たちに自分事として考えてもらうのであれば、『自分の食生活と地球に健康的な食生活はどうつながっているか』のような発問が最初にあると良いのではないか」「チェックリストの作成自体は有効だが、自分の結果を報告しあって終わりになってしまうのではないか」などの意見が挙げられた。これらの協議・意見交流は、単に感想の伝えあいではなく、ねらいに向けた授業改善の検討を通じた参加教員たちの授業に対する「深い学び」になっていた。

こうした指摘等を受け、川澄教諭は再度教材等を検討し、授業のねらいと照らし合わせ、必要な修正を行った。最終的には表 19 のようになった。教材の問い等も変更されている。（授業の詳細については、本報告書付属 DVD「開発教材」フォルダ内の「家庭 S1404 食

生活」を参照のこと)

課題 (概略)	「自分(私たち)」と「地球(環境)」の健康が両立する食生活のあり方として、の「フードシステム」の中の「つくる」「はこぶ・はんばい」「つかう」「すてる」それぞれの段階で工夫・改善できるといいことをあげましょう。(「つかう=消費者」として、自分の『チェックリスト』の結果も参考にしてください。)
Exp A	『飢餓・飽食と栄養不良』 問1) 空欄に適語を入れ、「問題点」を整理しよう 問2) 問1や資料より、『自分にとって』『地球(環境・社会)にとって』健康的な食生活に関係していることをあげましょう
Exp B	『動物性・植物性食品』 問1) 空欄に適語を入れ、「問題点」を整理しよう 問2) 問1や資料より、『自分にとって』『地球(環境・社会)にとって』健康的な食生活に関係していることをあげましょう
Exp C	『自然と産物と食生活』 問1) 空欄に適語を入れ、「問題点」を整理しよう 問2) 問1や資料より、『自分にとって』『地球(環境・社会)にとって』健康的な食生活に関係していることをあげましょう
期待する解答の要素	<ul style="list-style-type: none"> ・食品の種類が多様であるからこそ、正しく選択できる力の重要性を確認する。 ・自らの食卓から見えないところに存在する様々な負荷を知り、日頃より想像できる。 ・トレードオフの上で、自分に適した食行動のためにすぐにできることを見出す。 ・充実した食生活を実践するために、短期的・長期的視点を併せ持つ。

表19: 公開授業(川澄教諭) デザインの概要(最終案)

このように、オンラインでの協議を実施することで、時間や場所の制約なく積極的な意見交換を行うことができる。また、授業者と CoREF のやりとりだけでなく、研究開発員同士でのやりとりができることで、学校を超えた連携がとりやすくなるとともに、それぞれの教員がこれまでの経験から得た視点を共有しながら教材の改善ができる。

また、公開研究授業以外の教材についても同様に情報交換サイトによる意見交換・共有が行われており、川澄教諭は公開授業で実施した教材の他にも2教材を情報交換サイトについて投稿が行われ、うち1教材は他校の研究開発員が勤務校で実践するなど、教科部会での連携や情報交換サイトの積極的な活用が見られた。

c) 公開授業の実施と事前協議・事後協議 (図14)

こうした一連の授業案の改善を行った後、11月8日(水)に授業実践が行われた。当日は対面による実施とし、授業前に20分程度の事前協議、授業後に70分程度の事後協

議を併せて行った。当日は研究開発員をはじめ、初任者、実施校の他教科の教員など約20名が参加した。

令和5年度公開授業の実施例

教科・科目 家庭基礎（自分も地球も健康な食生活を目指して；家庭S1404）
 実施日 令和5年11月8日（水）
 会場校 県立川越総合高等学校


③協議Ⅱ 10:55～12:05

①協議Ⅰ 9:25～9:45

1) 授業者より、前時までの学習内容等を説明
 2) 参観者が問題を解く
 3) 授業者より、授業のねらい等の説明
 4) 生徒は期待通りの活動ができそうか、協議


【参加者の声】
 ・それぞれのエキスパート資料の内容が多く、生徒は時間がかかったり読み取ることが困難なのではないか

②授業見学 9:55～10:45



参加者は生徒もしくはグループの発言・活動を追う
 （画像右は学瞰レコーダーで撮影）

③協議Ⅱ 10:55～12:05



1) 事前想定と比べた生徒の学びの実態
 【参加者の発表（クロストーク）】
 ・エキスパートの内容を自分事として十分受け止めができていなかった
 ・穴埋めの内容だけを伝えて終わってしまった
 ・問1の穴埋めは書ける生徒は多かったものの、問2の自分と地球にとっての記述までかける生徒は少なかった
 2) ねらいに向けた学びをより引き起こす工夫
 【参観者の発表（クロストーク）】
 ・資料共有のためにジャムボードなどICTを活用すると時間短縮にもつながりそう
 ・テーマを絞った方が自分事につながりそう
 ・エキスパートから問を削除して、必要な部分をマーカーで引かせることで自分の言葉で説明させてはどうか

図14：未来を拓く「学び」プロジェクト 公開研究授業の様子

事前協議では、授業者から前時までの様子を話した後、参加者が実際に課題を解いた。その後川澄教諭から授業のねらいや生徒の活動の様子などを説明したうえで、各自で生徒の活動の予想をした。生徒の活動を予想することで、生徒の実際の活動がこちらの期待したものかどうか、比較・検討することができる。また、授業を参観するときには、1人の生徒やグループを観察し続け、具体的な発言や行動から生徒が自分の考えを変えていく様子を追うようお願いした。これらにより、その子が今何をどう考えているのか、つまりいつているとするとどんなところつまづいているのかを丁寧に見ていくことができる。事後協議では、これらの事実に基づいた協議ができるとよい。

公開授業の際、生徒の学びの活動の様子を撮影し、発話を書き起こすことができる「学瞰レコーダー」（詳細は、第2部第4章第3節参照）を用いて生徒の活動を記録した。今回は時間の都合で当日の事後協議の際には、発話を書き起こしたデータの共有ができなかったものの、次年度以降は協議での活用も視野に準備を進めたい。

事後協議では、グループに分かれ、まず「授業者の事前の期待や想定と比べて、子ども

の学びの様子について見えてきたこと」を協議した。ここでは子どもの学習について、期待や想定通りの姿、想定外のみならずなど、気づいたことだけを話してもらい、改善点などはこの後の協議で交流する。ここでは「ジグソー活動で穴埋めの内容だけを伝えて終わってしまった」「課題設定が自分と地球とを比較した内容であり、なかなか自分事として捉えることが難しかった」などの生徒の様子が共有されていた。

次に、これらの生徒の学びの様子を根拠にして、「よりねらいに向けた学びを引き起こすために授業デザインや支援の工夫として考えられること」を議論した。デザインや支援の良かった点はもちろん、より良い思考や対話に向けてできる問いや支援の工夫などが中心となる。研究開発員からは、「テーマを絞った方が自分事につながりそう」「穴埋めだけで終わってしまう生徒や、ジグソー活動で穴埋めの内容だけを説明して終わりになる生徒もいる。自分事として捉えるには、あえてエキスパート活動の間をなくし、資料にマーカーを引かせて重要な部分を自分で説明できるような形にしても良いのではないか」「テーマが大きく、それに伴い資料も多い。時間が足りず十分なジグソー活動にならなかった。ジャムボードなどICTを活用すれば時間短縮につながるのではないか」などの意見が挙げられた。これらの意見は、川澄教諭の授業だけでなく、それぞれの授業への改善点にもつながると考えられる。

d) 第2回教科部会

第2回教科部会は1月29日(月)に行われた。川澄教諭による公開授業の実践報告では、実践の振り返りと、公開授業後の事後協議を踏まえ、別クラスでの2時間での授業実践について説明が行われた。公開授業の振り返りでは「飢餓や糖質など、栄養に関する部分が弱く、一部の班で動物性たんぱく質と植物性たんぱく質など食品に触れた班が少なかった」「学瞰レコーダーで撮影した動画を視聴すると、想定にない生徒の学びの姿が見られた」など、事前の想定と生徒の学びの実態の差について報告があった。公開授業後の実践では「ジャムボードを活用し、『つくる』『はこぶ・はんばい』『つかう』『すてる』の4段階の解答を色分けすることでわかりやすく共有できた」など事後協議で挙げられた支援の工夫の実践について報告をしていた。また、参加した研究員の実践報告では、「(川澄先生が作成した教材を使用したので)資料があるだけで授業実施のハードルが下がる」「家庭科は生活者の視点で学習させる科目であることを考えると、他教科と学びが繋がりがやすい。教科横断的な視点があっても良いのではないか」など、教科部会の中での連携や今後の教科間連携につながる意見も出ていた。

④教科部会のまとめ

前項で挙げた家庭部会の例のように、それぞれの教科部会が公開授業を軸とし、オンラインも活用しながら授業研究を推進してきた。次ページ以降、教科部会ごとに担当指導主事がまとめた今年度の活動報告及び各教科における協調学習の授業づくりにおけるデザイン原則を掲載する。

未来を拓く「学び」プロジェクト 国語部会 活動報告

(1) 研究開発員数 74名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年7月12日/オンライン]
 - ・前年度から今年度の第1回教科部会までに行った実践について報告
 - ・参加者から出た質問「外国籍の生徒への対応」等についての協議
- 第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業 [令和5年11月27日/対面]
 - 県立岩槻北陵高等学校 小秋元三八人 教諭
 - 言語文化『羅生門』
- 第3回教科部会 [令和6年1月29日/オンライン]
 - ・今年度行った各自の実践や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

教科部会では若手、中堅、ベテラン、様々な年代同士で対話を深めることができた。また、教科横断的な視点を取り入れて英語科や社会科との実践を行ったり、地域横断型授業を他県の学校と行ったりするなど、様々な取組があった。生成AIについても積極的に活用を進める取組が複数あった。

具体的な学びのエピソード

「問い」を出す難しさがある。(効果的な)教材の選び方も難しい。一般的な資料の読み方・味わい方も教えたい。授業者は、逸脱しすぎない程度に「軌道修正」もしなくては。

今年度、方言の授業を実施したとき、プラス面に加え、マイナス面の資料も用意。ただ、授業者の意見が強くなりすぎずにした。でも授業者も生徒と同じ目線で話をしたい。

国語部会(1班)

どこでもできる(定時制の生徒でもできる)シグソー活動を目指したい。プリントでの空欄の使い方……普段の授業ではできないことやコンプレックスを、軽減したい。

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則



生徒にすべてをゆだねる勇気を、教員が持つ!

- ①生徒たちは、なぜ劣等感いだくのか?→中学校の体験か? 「(自分は)何もできない」という劣等感を、軽減させたい。
- ②生徒に任せて授業を展開する厳しさ。→「問い」をどう出すか。取り組みやすさを重視。プラスとマイナス、双方の資料をつくと良いかも。
- ③プリントの形式→穴埋めか、自由記述か。ベストをさぐる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 地理歴史部会 活動報告

(1) 研究開発員数 55名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和5年7月12日/オンライン]

- ・本年度の教科部会における取組について
- ・研究開発員の取組状況報告、情報交換

■第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業 [令和5年10月31日/対面]

県立深谷高等学校 杉本祐輝 教諭
日本史B『室町幕府』

■第3回教科部会 [令和6年1月24日/オンライン]

- ・公開授業実施報告
- ・授業デザイン原則の作成に向けた協議

(3) 今年度のまとめ

教科部会や公開授業に出席した研究開発員は、実践に関する情報を共有し課題点を協議できたことに深く意義を感じられていた。しかし、各回の出席者が少数に留まった点は課題であり、次年度に改善を図る必要がある。

具体的な学びのエピソード

グループ分けの際に学力や生徒の関係性を考慮して編成することによって、より良い対話が生まれたり、多様な意見が生まれることがある。

教員による生徒への介入が多いと対話が途切れるが、エキスパート中に生徒同士の意見の交流が見られない場合には視点を提示するための質問も効果的であった。

地理歴史部会

1つのエキスパート資料で完結しない内容を設定することで、シグソー活動において学習者同士の相互作用が働き、授業後も学びが継続する。

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則



期待する解答の性質（オープンエンド・クローズドエンド）によってグループ編成を工夫することが必要である。グループ活動が円滑になることで、意見が広がりを見せたり、学習の相互作用や学びの継続が図られたりするようになる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 公民部会 活動報告

(1) 研究開発員数 15名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和5年7月12日/オンライン]

- ①昨年度の取組 (情報交換)
- ②今年度の取組 (方向性の検討) ⇒「公共」の大項目Aの活用

■第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業 [令和5年11月8日/対面]

県立上尾高等学校 岡田恵甫 教諭
政治・経済『国民所得と経済成長』

■第3回教科部会 [令和6年1月30日/オンライン]

- ・各研究開発員の実践報告
- ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

公民科では「公共」における取組を推進していくこととした。特に現代の諸課題をテーマとする活動の中で、大項目Aの「見方考え方」を活用すること重視した。「見方考え方」を生徒が意識し活用できるようになることで、正解のない問いをテーマとしたジグソー活動などがより効果的になると考えられる。

具体的な学びのエピソード

公民部会

トロッコ問題などで、カントやベンサムの見方考え方を紹介し、生徒同士で対話させると様々な意見が飛び交う

エキスパートを分けているが、「 $A+B+C \Rightarrow ABC$ 」など、各エキスパートの要素を並べた模範解答のようなものが増える

自治体のゲーム時間制限について、個人の自由権を制限しているのではないかという問いに対し「見方考え方」を活用した話し合いができていた

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則



- ・「正解のある問い」か「正解のない問い」かを明確にする
- ・「正解のない問い」においては、生徒が「見方考え方」を意識して問いに対する「答え」をもてるようにする。活用する「見方考え方」は生徒が身に付けているものでも良いし、例えば大項目Aで学習した「見方考え方」でも構わない。⇒「見方考え方」を意識することで、意見はより多様になる。また言語化しやすくなるのではないか。

未来を拓く「学び」プロジェクト 数学部会 活動報告

(1) 研究開発員数 71名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和5年7月4日/オンライン]

- ・今年度の数学部会の計画について
- ・今年度の研究発表に向けて

■第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■第3回教科部会 [令和6年1月26日/オンライン]

- ・今年度の実践についての報告ならびに共有
- ・今年度の授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

今年度は、研究発表者である金子先生の学習指導案・指導計画を中心に、生徒の日常生活の事柄を題材とした発展的な学びをテーマに、ジグソー法の効果的な指導について深めることができた。次年度も引き続き、数学科におけるジグソー法の効果的な指導・授業デザインについて検討したい。

具体的な学びのエピソード

数学部会

・教師が話し過ぎてしまった。

・生徒の数学に関する言葉（用語・表現）の理解が不十分であった。

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



教師主導ではなく、生徒同士で自立解決できるように、生徒から出た疑問を、教師の発問に変える。

未来を拓く「学び」プロジェクト 理科部会 活動報告

(1) 研究開発員数 48名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和5年6月16日/オンライン]

- ・前年度に行った実践や今年度の構想について報告
- ・授業づくりの情報交換

■第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業 [令和5年11月10日/対面]

県立坂戸高等学校 寺本 英晃 教諭
化学『コバルト錯体の組成式決定』

■第3回教科部会 [令和6年1月26日/オンライン]

- ・今年度行った各自の実践や公開授業の報告
- ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

- ・各教科部会で活発な意見交換が行われた。
- ・先進的な内容を取り入れたものや、教科横断的な視点を活かしたものなどさまざまなアプローチがみられた。
- ・学んだ知識を協調学習で生かすためにはエキスパート活動を大切にすべきとの意見が多かった。

具体的な学びのエピソード

理科部会

エキスパート活動を時間をかけてまとめさせる。一人で考えさせず、エキスパート班のメンバーで協力して模範解答をつくるという雰囲気で行った。

説明しすぎるとあっさり答えを出してしまいつまらない、説明しないと答えにたどり着かずつまらない

教え合う様子が見られたものの、その後の学習では「あのときやった」となるような期待をしたほどのものまでには至らなかった。

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則



エキスパート活動で本当にエキスパートになることが大事
そのために・・・

- ✓ 興味を引く課題を設定する
- ✓ 可能なら資料を事前に伝えておく
- ✓ エキスパート活動にしっかり時間をかける

未来を拓く「学び」プロジェクト 保健体育部会 活動報告

(1) 研究開発員数 33名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年6月26日/オンライン]
 - ・前年度に行った実践や今年度の構想について報告
 - ・参加者から出た質問「エキスパート資料の内容、量」についての協議
- 第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業 [令和5年10月23日/対面]
県立宮代高等学校 萩原 育未 教諭
体育『武道(柔道)』
- 第3回教科部会 [令和6年1月22日/オンライン]
 - ・今年度行った各自の実践や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

教科部会では、実践する中で出てきた疑問を全体で協議し、共有を図るなど、前年度より充実した運営を行うことができた。
しかしながら、前年度と比較して、公開授業や教科部会の参加人数は減少していることが課題である。

具体的な学びのエピソード

運動量の確保のためのICTの有効活用や、生徒からの感想や、感覚の意見の吸い上げの方法について

メインのテーマ設定に対してエキスパート課題の設計

保健体育部会

どうしても技能に目がいってしまう

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則



ICTを活用した評価（Googleフォームで感想記入、動画撮影共有、クロストークをICTで代用）ICTを活用した評価は今後必須になる
スキルが高い＝評価が高いではない。課題に向かう力や、生徒がどう考えて課題等に取り組んでいるか。これらをICTで吸い上げられるような授業づくりをしていくと良いのではないかと。

未来を拓く「学び」プロジェクト 芸術部会 活動報告

(1) 研究開発員数 15名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年7月26日／オンライン]
 - ・前年度に行った実践や今年度の構想について報告
 - ・参加者から出た質問についての協議
- 第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日／オンライン]
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業 [令和5年12月19日／対面]
 - 県立芸術総合高等学校 示野 充彦 教諭
 - 美術『ジャポニズム～日本風の印象派～』（美術科 第1学年）
- 第3回教科部会 [令和6年1月22日／オンライン]
 - ・今年度行った各自の実践や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

公開授業をマイスターの示野教諭に実施していただいた。美術科の特色を生かし、言葉だけでなく絵も使ったジグソー活動が展開し、興味深いものであった。しかし、公開授業や教科部会の参加人数が少なく、せっかくの授業を広く共有することができず、残念であった。

具体的な学びのエピソード

芸術部会

導入時、説明時間が長く、結果としてクロストーク等が急ぎ足になってしまった。

授業者が伝えていないことや、資料に記載していないことについて、生徒が気付いていた。

課題設定が曖昧であった。

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則



- ・学校、教科の特性をふまえて、絵でまとめて、説明させる課題設定。
- ・授業のねらいに沿った課題文や問いの精査。

未来を拓く「学び」プロジェクト 外国語部会 活動報告

(1) 研究開発員数 65名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和5年6月30日/オンライン]

- ・今年度の取組
- ・昨年度の取組についての情報交換

■第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業 [令和5年11月17日/対面]

県立所沢商業高等学校 木村 和弘 教諭
英語コミュニケーション I 『We Are Part of Nature』

■第3回教科部会 [令和6年1月26日/オンライン]

- ・公開授業報告
- ・今年の取組報告

(3) 今年度のまとめ

教科部会では授業実践報告を中心に行い、生徒が主体的に学ぶ意欲をはぐくむ授業案について検討を重ねた。課題として、エキスパート活動で使用する英文の難易度設定が挙げられた。

具体的な学びのエピソード

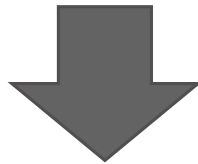
・エキスパート資料の英文の難易度が高く、読む時間が足りない。

・エキスパート資料の情報量が多く、読む時間が足りない。

・課題の設定に対して、生徒が十分理解できておらず、期待する解答に至らなかった。

外国語部会

これらのエピソード から言えそうな 授業デザイン原則



- ・エキスパート資料を生徒が自力で読めようになりやすい表現を使う。
- ・視覚教材を用いて、英文を読みやすいよう補助する。
- ・課題の設定を明確にするため、Oral Introductionを活用することで、生徒の目線を合わせる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 家庭部会 活動報告

(1) 研究開発員数 6名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年7月3日/オンライン]
 - ・前年度に行った実践報告
 - ・今年度の授業計画、授業づくりの工夫等についての情報交換。
- 第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業 [令和5年11月8日]
 - 県立川越総合高等学校 川澄美夏 教諭
 - 家庭基礎 『食生活について』
- 第3回教科部会 [令和6年1月29日/オンライン]
 - ・今年度行った授業実践報告や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成
 - ・次年度にむけたまとめ

(3) 今年度のまとめ

経験年数の異なるメンバー構成であったため、教科部会を通じて学び合う場面が充実していた。同じ教材を使って、2つの学校で実施するといった新たな試みは、教材づくりの負担軽減にもつながり、この事業に対する敷居の高さを改善することにもつながるのではないだろうか。年々、研究開発員の人数が減っていることが課題である。

具体的な学びのエピソード

家庭部会

「自分にも地球にも健康的な食生活とは？」より

資料読み取り力の差

↓

資料内容共有時のわかりやすさ・わかりにくさに直結
(生徒が資料内の文章を抜き出しで伝えがちなため)

「自分にも地球にも健康的な食生活とは？」より

班での発話量の差

↓

答えを出す際に各資料内容の割合に偏り発生
(発言された諸内容を組み合わせるため)

「自分にも地球にも健康的な食生活とは？」より

当分野への関心・既有知識の差

↓

学習や協議の正しさ・深さに影響
(複数の要点を押さえながら進め重ねる必要があるため)

これらのエピソードから言えそうな
授業デザイン原則



授業展開の事前想定がキーとなる。

- ・ねらい(何をどこまで理解させたいか)を明確に。資料から必ず拾ってほしい部分・自分の言葉で答えてほしい部分を教員がよく理解する。問いの工夫により、授業がより良くなる。

理解度の差への対応

- ・理解度に差があるグループほど生徒同士の学びあいが起こりやすくなっているため、生徒が学びあう時間を充実させる。
- ・事後指導等、教員による補足・問いかけ・解説等をする際は、授業内容について生徒たちと丁寧に共有することで、さらなる新たな気づきに繋がる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 情報部会 活動報告

(1) 研究開発員数 11名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年7月4日/オンライン]
 - ・自己紹介、前年度に行った実践や今年度の構想について報告
- 第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業 [令和5年10月31日/対面]
 - 県立松伏高等学校 新井 雅史 教諭
 - 情報I『情報デザイン』
- 第3回教科部会 [令和6年1月24日/オンライン]
 - ・公開授業と今年度行った各自の実践について報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

1校1名配置であることが多いため、授業実践を共有する貴重な機会となった。教科特性を活かし、Google Workspaceや1人1台端末を活用した授業実践の蓄積が増えている。協調学習の取組を評価にどうつなげるか等、実践共有だけでなく様々な視点から協議を行うことができた。

具体的な学びのエピソード

情報部会

正門前の横断歩道をテーマとしたことで、生徒は自分事として捉えることができ、話し合いが進んだ。

↓

身近なテーマを設定することで、主体的に問題解決に取り組むことができる。

どこにでもある既存のシステム（信号）について疑問を投げかけることで、生徒にとって考えやすい問いとなった。

↓

身近な情報システムに対し、どのように情報が関係しているかを考えることができる。

エキスパート資料をGoogleドキュメントとしたことで、情報量が増し、GIF（アニメーション）画像やYouTube動画を活用することができた。

⇕

シグソー資料を紙（プリント配布）としたことで、対面での活動を一人一人が積極的に行うことができた。

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則

「情報デザイン」における従来の手順（設計→制作→実行→評価→改善）にこだわることなく、評価・改善から情報デザインを考えた上で、設計、制作、実行へ進める。

これにより生徒の主体的な問題解決へ向けた活動を期待することができる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 農業部会 活動報告

(1) 研究開発員数 5名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年7月11日/オンライン]
 - ・本年度の事業及び教科部会の取組について
 - ・協調学習の「これまで」と「これから」について
 - ・テーマの確認
- 第2回教科部会 [令和5年11月10日/オンライン]
 - ・重点研究授業における教材の検討
 - ・参加者による体験と学びのシミュレーション (想定)
- 公開授業 [令和5年11月28日/対面]
 - 県立鳩ヶ谷高等学校 教諭 指田 慎人
 - 総合実習 『作物の病気が起こる原因』
- 第3回教科部会 [令和6年1月24日/オンライン]
 - ・日々の授業改善に向けた「授業デザイン原則」の作成
 - ・各研究開発員からの取組の振り返りと指導主事による講評

(3) 今年度のまとめ

全ての取組がオンライン、初めての委員が多い年度となったが、新たな視点から有意義な活動ができた。重点研究授業者をはじめ研究開発員と「導入の重要性」「生徒の対話を促す教員の適切なファシリテート」「評価の観点と見取りの工夫」で特に深い協議と検討ができた。

具体的な学びのエピソード

農業部会

プリントなどに既存知識の復習の項目を設けると、その後の資料の読み込みがよい。

全く発話のない班がある。机間巡視の際、生徒に注目して欲しい部分を示すと、何らかの活動を始める。

実習がメインになってしまい話し合いが生まれなかった。実習と座学の結びつきを気づかせたかったが、違う部分に注目していた。

これらのエピソードから言えそうな
授業デザイン原則



- 課題をしっかりと捉えることができていないと考えることが難しい
 - 考えることの「きっかけ」を求めている
 - = 考えるきっかけを「作る」
 - …与える資料の構成・内容や机間巡視時の声掛けを工夫して生徒の理解に合わせた介入により「きっかけ」を作ることができる

未来を拓く「学び」プロジェクト 工業部会 活動報告

(1) 研究開発員数 16名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和5年6月27日/オンライン]

- ・昨年度の実践紹介
- ・今年度の計画・情報交換

■第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業 [令和5年11月24日/対面]

県立越谷総合技術高等学校 横田一弘 教諭
工業・情報技術科『セキュリティ技術』

■第3回教科部会 [令和6年1月22日/オンライン]

- ・公開授業報告、今年度実践した協調学習の報告
- ・「授業デザイン原則」の検討

(3) 今年度のまとめ

今年度も昨年度と同様に集合型での公開授業を実施し活発な研究協議を行った。「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善に向け、授業実践を踏まえて「授業デザイン原則」の検討を行った。

具体的な学びのエピソード

工業部会

2進数を求める課題。協調学習でアルゴリズムをつくり、C言語のプログラムを実行し、それが正しいか検証する。(座学と実習の往還)

安全管理・工程管理・原価管理のトータルバランスを考えながら計画する難しさを口にしていった。(実社会との関連性)

自分たちが実習で学んできた技術を活用した内容を答えに挙げる生徒が複数いた。(学習内容のつながりを意識)

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則



授業の題材やエキスパート資料の構成について生徒の学びを深めるために、他の科目や実習との関連性や、実社会(産業界)における技術について触れることが重要である。

未来を拓く「学び」プロジェクト 商業部会 活動報告

(1) 研究開発員数 16名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年6月28日/オンライン]
 - ・前年度に行った授業実践等の報告
 - ・今年度の授業計画等の情報交換
 - ・今年度の公開授業を行う研究開発員選出
- 第2回教科部会 [令和5年8月29日、30日/オンライン]
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業 [令和5年10月24日/対面]
 - 県立皆野高等学校 金子大信 教諭
 - 経済活動と法『契約と債権 意思表示』
- 第3回教科部会 [令和6年1月22日/オンライン]
 - ・今年度の授業実践報告
 - ・授業デザイン原則の検討

(3) 今年度のまとめ

第1回教科部会から第3回教科部会まで、研究開発員による情報共有や意見交換が活発に行われた。今年度は皆野高校で公開授業を行うこともできた。たくさんの研究開発員の生徒の学びを支援するための熱心な思いが感じられた。しかし、部会に参加した研究開発員は固定化しており、次年度は、1人でも多くの研究開発員の参加を促したい。

具体的な学びのエピソード

商業部会

【資料の工夫と導入】

- ・生徒の身近な話題やアニメ、漫画などを盛り込んで、イメージしやすくする
- ・生徒が“話し合いをしやすい教材”を作成する
(話し合わなくても答えが1つになるものは、話し合いが続かない)
- ・導入で学びの雰囲気をつくる

【時間配分と助言】

- ・生徒自身が考える余地を残したアドバイスを用意する
- ・助言のタイミングに注力して生徒の変化を見る
- ・生徒はクロストークで初めて理解したり、理解が深まったりすることがある
(次の活動に進む基準を「全員の理解」としない)

【言語表現と理解】

- ・文章記述させるなど表現のチャンネルを増やす(学力差に関係なく、人付き合いが苦手な生徒がいる)
- ・相手の話を整理して理解させ、相手の理解度に合わせた表現や言葉を遣わせる
- ・フレームワークを用いて、自分の考えを順序立てて表現させる

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



○ クロストークの時間を十分に確保する
(他者の答えと根拠を知り、自分なりの考えを整理する過程を大切にする)

○ 生徒自身の考えを論理的・構造的にまとめようとする過程でのつまづきを適切に捉え、生徒の主体的な活動を促す“支援”を心掛ける

未来を拓く「学び」プロジェクト 看護・福祉部会 活動報告

(1) 研究開発員数 8名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和5年7月3日/オンライン]
 - ・昨年度の実践の報告と、今年度、取り組んでみたい単元、授業実践のポイント等情報交換
- 第2回教科部会 [令和6年1月23日/オンライン]
 - ・今年度行った各自の授業実践の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

教科部会では、各自の実践について共有し、改善に向けて協議を行った。2回の実施であったが、充実した内容となった。
2回目の部会は、参加人数が少なく、1校だけの参加であった。

具体的な学びのエピソード

生徒のレベルに合わせた指導案を作成する
→上の子もいれば下の子もいる

→最後にまとめの時間を作り、復習する時間があると軌道修正できる

実生活や自分の住んでいる地域のことなど、生活に密着した課題設定
→他の授業との関連も紐づく

福祉部会

授業を行うタイミングと内容が重要
→間が空くと忘れてしまう
→週をまたぐとだめ

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則

生活をベースにした題材や資料を用いることで、生徒の学びが定着しやすい
→自分事として考えられるようになる

何にでもできるからこそ、いつ・どのような内容でやるか
→タイミングが重要

(4) 今後に向けて

「未来を拓く『学び』プロジェクト」は、昨年度から年限を限った特別な事業ではなく、県立学校の恒常的な授業改善のための取組として位置づけられるようになった。特別な予算措置のない中で、様々な取組と連携しながらプロジェクトの資産を活用し、発展させていくフェーズに入ったと言える。

その点で今年度特筆すべき展開が2つあった。1つは、6月にマイスター教員による公開授業を実施し、初任者も参加することができたことである。前述のように埼玉県では高等学校初任者研修の一環として「知識構成型ジグソー法」の授業研究を軸とした「授業力向上研修」を行ってきた。この研修は、授業研究のサイクルを1年間に2回まわすことを通じて、初任者が主体的・対話的で深い学びをデザインするための視点や力量を身につけることをねらったものである。この研修の中でも、各教科の先行事例を基に授業づくりの視点を学んだり、先輩教員から実践の話の聞いたりする機会などは設けてきたが、実際に初任者が自分の実践の前に「知識構成型ジグソー法」の授業を見る、それも「仮説検証型授業研究」の進め方でしっかりと授業研究を体験する機会はこれまでなかった。当日の授業研究会では、生徒の学びを丁寧に見とることで、初任者がマイスターの先生方の実践から学ぶとともに、マイスターの先生も想定していなかった生徒のつまずきに気づき、建設的な提案をする姿も見られた。多くの先生方がじっくりと時間をかけて取り組める初任者研修の質の充実のために、「未来を拓く『学び』プロジェクト」そしてマイスターの先生方のリソースを効果的に活用する機会を設けられたのは、初任者研修、プロジェクト双方を生かす教育委員会の先生方の効果的なデザインであった。

もう1つは、今年度研究開発員の先生方の中で教科等横断的な「知識構成型ジグソー法」授業の提案が多く上がってきた点である。その中では、例えば英語科の先生が英語・地理の教科横断の教材を掲示板にアップして、地歴科の先生方から意見をいただくような姿も見られた。現在埼玉県では「県立高校学際的な学び推進事業『学・SAITAMA プロジェクト』」を軸に、教科等横断的な学びの実践研究を進めている。「未来を拓く『学び』プロジェクト」で研究を進める先生方は、各学校で授業改善の中核として期待される先生方であり、こうした先生方が本プロジェクトで培った視点やジグソーの手法、先生方同士のつながりを自発的に県の取り組む新しい重点課題の解決にも活用している姿が見られたことは、プロジェクトの新たな発展可能性の一例として重要である。

次年度以降は、マイスターやそれに準ずる先生方の活用を軸に、一層様々な場面で本プロジェクトのリソースが活用されるとともに、あわせて本プロジェクトが初任者研修の先に先生方が学ぶ場としても引き続き機能し続けることが期待される。時間や空間、予算の制約がある中で先生方の学びを止めないために、どのような形をとりうるのか。今年度試みた学瞰レコーダーによる授業記録の活用可能性の検討なども含め、教育委員会の先生方と CoREF とが知恵を出し合い、またマイスターの先生方にも積極的な提案をいただきながら、次にできることを模索していきたい。

4. 連携の核を育てる ～本郷学習科学セミナー～

(1) 「本郷学習科学セミナー」のねらい

「本郷学習科学セミナー」は平成 26 年度より開始した CoREF 主催の月例研究会である。CoREF と連携する教育委員会等において「知識構成型ジグソー法」を用いた協調学習の授業づくりプロジェクトの中核を担う先生方を主な参加者とし、学習科学に基づく継続的な授業改善を支えるための自治体や学校の枠を超えた学びの場として運営されている。カリキュラムと各回プログラムは、その年度の参加者と協調学習の授業づくりプロジェクトの課題に応じて、CoREF がデザインし、運営も CoREF が行っている。

セミナーの実施目的は、「人はどのように学ぶか」やそれに基づいた授業デザインに関する実践的見識をもとに協調学習の授業づくりを推進するミドルリーダーの育成を支援すること、また、授業研究の質向上を支えるネットワークの構築および発展を支援することである。CoREF では、2 つの目的の達成をとおして、授業改善のための取組を、学びのデザインと実践及び振り返りのサイクルをとおして人の賢さを探究する「学習科学」の研究として日常化させ、参加者の主体的な取組として継続的に発展させていきたいと考えている。

連携する教育委員会のうち、埼玉県、鳥取県、鳥根県では、授業改善を推進するミドルリーダーの資格認定制度を設け、本セミナーへの参加を認定要件の 1 つとしている。こうしたシステムレベルの工夫とも連動させながら、授業改善ネットワークの核を育てる学びの場としてデザイン、運営されているのがこのセミナーである¹。

(2) スケジュールおよび参加者

令和 5 年度の「本郷学習科学セミナー」の日程と参加者数を表 20 に示す。コロナ禍以後、基本的にはオンライン形態による開催（資料電子データの事前配布と Zoom での Web 会議）となっている。ただし今年度は、一部オンラインと対面の併用で実施することができた。

各回の参加者は基本的には 30 名前後であり、半数以上が、昨年度以前からセミナーに

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
日付	5/27	6/24	7/22	8/19	9/30	11/25	12/16	1/20	3/2	
形態	オンライン	オンライン	オンライン	併用	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	併用	
人数 (継続)	40 (22)	26 (13)	26 (16)	41 (23)	29 (19)	23 (15)	28 (18)	22 (14)	未 実 施	80 (42)
内 実践者	25	19	18	26	21	17	19	17		57
訳 その他	15	7	8	15	8	6	9	5		23

表 20：令和 5 年度本郷学習科学セミナーの日程と参加者数及びその内訳

¹ 昨年度までの本セミナーの展開については、平成 26 年以降の報告書第 1 部第 1 章（本書巻末 DVD にも収録）に詳しい。あわせてご参照いただきたい。

継続して参加している。継続参加者の多くは、埼玉県または島根県の資格取得者である。また、参加者の内訳については、実践者とその他に分けて示した。「実践者」は教諭、指導教諭や非常勤講師等、小中高等学校で実践を行っている立場の参加者である。「その他」は、指導主事などの教育行政関係者、学校管理職、研究者などである。実践者以外の参加者には、かつて教員として協調学習の授業づくりを推進し、ミドルリーダーの資格認定を経て今は別の立場でプロジェクトにかかわってくださっている方も多し。以上のような参加者内訳からは、本セミナーが、実践者だけでなく、様々な立場で協調学習の授業づくりプロジェクトの核を担う人々が、立場や地域を超えて継続的に学び合う場となっていることがうかがわれる。またこうした参加状況が実現していることは、(1)に記載したセミナー実施目的が、参加者を派遣する自治体等の関係者にも浸透しつつある結果と言えようである。

なお、参加者の地域分布としては、首都圏外も含む1都1府15県と広域であった。1人あたりの参加回数も継続して多かったところから、場所や時間の制約が少なく、少ない費用で参加できるオンラインのメリットも引き続き生きていると考えられる。

(3) 令和5年度「本郷学習科学セミナー」年間カリキュラム

令和5年度のカリキュラムを表21、22に示す。今年度も、カリキュラムは昨年度以前から一貫した方針でデザインした。具体的には、参加者一人ひとりが学びの仮説検証による授業研究のサイクルをより質高く回せること、サイクルを回すことで見えてきた気づきを教科やプロジェクトの単位で生起している課題と結びつけて言語化し、取組の次の指針を得ることを目指し、下記に示す4つの要素を組み合わせている。

要素は表のカッコ内に示した。また、プログラムタイトルの後に【新】とあるものは、今年度新規に開発したプログラムである。回の欄には半日/全日の別を記載した。オンラインによる活動の負荷や旅費の効率性を考慮し、オンラインと対面併用の形態で実施した回を全日のプログラムとした。

- I. 「知識構成型ジグソー法」による協調学習の授業づくりの基本的な考え方に関する内容
- II. 学びの質を支える授業研究の考え方や進め方に関する内容
- III. 学びの質を支える授業研究の実践
- IV. 協調学習の授業づくりから見えてきたことを周辺の様々な課題に活用してみる試み

年間のカリキュラムは、「知識構成型ジグソー法」と「仮説検証型授業研究」による協調学習の授業づくりのねらい、基本的な考え方と手順等を再確認するプログラムから始まる。第1・2回では、ミドルリーダーとして学びを深める前提として、協調学習の授業づくりに係る参加者の取組の概要や特性を自身で言語化する内容となっている。ただし、今年度は経験の浅い新規参加者が例年に比して多かったため、「教科の実践例共有」のプログラムを追加した。続いて、第3回では、近年の新しい教育課題に触れ、今後の取組を

少し視野から展望するプログラムを位置づけている。また、第 4 回では、「仮説検証型授業研究」に ICT も活用した、今取り組みたい授業研究の一連の過程をまるごと体験し、有効性や課題を確認した。これらをふまえ第 5-8 回では、9 月以降各学校等で公開授業等の機会が増える時期に合わせ、「学びのシミュレーションによる授業案検討」「実践報告ラウンドテーブル」のプログラムを連続で実施し、学びの質を支える授業研究の実践をじっくり行う。最終の第 9 回は、第 2 回で実施した『「知識構成型ジグソー法」による協調学

回	プログラム	内容
1 (全日)	<p>〈午前の部〉 講義・演習「一人ひとりの学ぶ力を引き出す授業のデザイン」(I)</p> <p>〈午後の部〉 講義・演習「主体的・対話的で深い学びの質を支える授業研究の進め方」(II)</p>	<p>〈目標：授業づくりのビジョンと前提の共有〉 午前の部では、「知識構成型ジグソー法」を使った協調学習の授業づくりの基本的な考え方と目指す学びのイメージ、手法の特徴等を確認した。</p> <p>午後の部では中学校社会の授業の事前研・授業観察・事後研を、説明を聞きながら実際にやってみることで、児童生徒の学びの想定と検証を軸とした授業研究（仮説検証型授業研究）の進め方とポイントを学んだ。</p>
2 (半日)	<p>講義「このセミナーで目指すこと」(I)</p> <p>教科部会「これまでの実践例共有」(III)</p> <p>【新】 教科部会『「知識構成型ジグソー法」による協調学習の授業づくりにおけるデザイン原則の交流」(III)</p>	<p>〈目標：これまでのまとめと新たなスタート地点の共有〉 継続参加者による実践報告と、実践や観察から見えてきた学びの仮説（授業デザイン原則）づくりの活動をとおして、各教科で「知識構成型ジグソー法」を使った協調学習の授業づくりに関して、今年度の研究の指針を共有した。</p>
3 (半日)	<p>講義・演習「子どもたちの学びを見とるテスト作り」(IV) 【新】</p>	<p>〈目標：学びの質を支える授業研究の蓄積をふまえ、学校で日常的に行うテストのあり方を見直す〉 学校で日常的に行うテストにおいて、いかなる設問を用意すれば子どもたちの学びを見とるテストになりそうか、設問形式や構成、CBT の導入も視野に入れた問い方の見直しなどについて検討、交流を行った。</p>
4 (全日)	<p>〈午前の部〉 教科部会「授業デザイン検討」(III)</p> <p>〈午後の部〉 講義・演習「学級システムを活用した授業研究」(II・III・IV) 【新】</p>	<p>〈目標：学級システムを活用した「仮説検証型授業研究」の有効性について体験をとおして確認する〉 午前の部では、第 5 回で行うシミュレーションを見越し、教科部会で授業のアイデア検討や意見交換を行った。</p> <p>午後の部では、実際に 1 学期の授業で記録したデータを題材に、学級システムを活用した「仮説検証型授業研究」を行い、授業研究を深めると共に、こうした研究の有効性について学んだ。</p>
5 (半日)	<p>教科部会「学びのシミュレーションによる授業案検討」4 事例 (III)</p>	<p>〈目標：「仮説検証型授業研究」による授業デザイン検討〉 参加者が持ち寄った授業デザイン案を題材に、教科 MIX グループによる教材案体験と子どもの学びの想定と、想定に基づく教科部会での教材改善策の検討という 2 つの活動をとおして、学習者目線でどんな学び／つまづきが起こりそうかを予想し、それに基づいて授業の改善点を考えた。</p>

表 21：令和 5 年度「本郷学習科学セミナー」年間カリキュラム (1/2)

6 (半日)	「実践報告ラウンドテーブル」4事例(Ⅲ) 教科部会「授業案検討と実践紹介」(Ⅲ)	〈目標:「仮説検証型授業研究」による事前検討と事後協議〉 ラウンドテーブルでは、教科を超えたグループで「仮説検証型の授業研究会」の進め方による実践報告と協議を行った。教科部会では、その他検討中の授業案の検討や簡単な事例紹介を行った。
7 (半日長め)	「実践報告ラウンドテーブル」9事例(Ⅲ)	〈目標:「仮説検証型授業研究」による事前検討と事後協議〉 ラウンドテーブルでは、教科を超えたグループで「仮説検証型の授業研究会」の進め方による実践報告と協議を行った。
8 (半日)	「実践報告ラウンドテーブル」5事例(Ⅲ)	〈目標:「仮説検証型授業研究」による事前検討と事後協議〉 教科を超えたグループで「仮説検証型の授業研究会」の進め方による実践報告と協議を行った。
9 (全日・未実施)	〈午前の部〉 教科部会「『知識構成型ジグソー法』による協調学習の授業づくりにおけるデザイン原則の生成」(Ⅲ) 〈午後の部〉 演習「協調学習説明づくり」(Ⅰ) 演習(次年度の取組を展望する内容を予定)	〈目標:次年度の見通しを得る〉 午前の部では、第2回と同様の活動を、今年度の授業研究実績に基づいて改めて行う。 午後の部では、1年間の授業研究をとおして見えてきた「協調学習の授業づくり」の目的・進め方のポイント・意義などについて新規参加者への説明スライドの形で整理してみる活動をとおして、学びを振り返ると共に、次年度の取組の展望をひらく演習を行う。

表 22: 令和5年度「本郷学習科学セミナー」年間カリキュラム(2/2)

習の授業づくりにおけるデザイン原則の生成」を、今年度の授業研究の成果をふまえて改めて行うことで、参加者一人ひとりが今年度の研究の深まりを実感すると共に、授業づくりにおける次の課題を共有する。併せて、次年度の取組へのモチベーションを高めるための演習を設定する。以上のような流れにより、各参加者が、質の高い授業研究のサイクルを自分でも回しながら、研究から見えてきたことや、研究の目的、進め方そのものを言葉にし、学校や自治体、教科部会等のコミュニティに還元することをサポートしようとしている。

(4) 活動の実際

① 講義・演習「学瞰システムを活用した授業研究」の概要

以下では、第4回午後の部で実施した「学瞰システムを活用した授業研究」のプログラムを取り上げ、活動の実際について紹介する。

活動の流れを表23に示す。このプログラムは、「学瞰システム」も活用した「仮説検証型授業研究」について、講義で授業研究の目標や意図、進め方を確認し、授業研究の一連の流れを体験し、振り返るという流れでデザインされている。

プログラムのねらいは以下の2点である。

70分	<p>講義・演習 学瞰システムを活用した授業研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ○挨拶 (5分) ○導入講義 (15分) ○事前研 (簡易授業体験と生徒の学習の予想) (50分) <ul style="list-style-type: none"> ・簡易授業体験(35分)「ゲームをする自由は規制できるか」(高校2年生公民) ・授業者による授業のねらいや意図の説明 (5分) ・協議：生徒の学習の予想 (10分)
	(休憩)
60分	<ul style="list-style-type: none"> ○「学瞰システム」を活用したオンデマンド授業観察 (60分) <ul style="list-style-type: none"> ・システムの使い方説明 (5分) ・グループでの授業観察 (55分) <p>※記録した2つの班のうち、割り当てられた班を観察する。イヤフォンスプリッタを使って複数人で音声を聞き、協議班で話をしながら観察する。各自の手元記録用に「授業観察メモ」を配布。</p>
	(休憩)
50分	<ul style="list-style-type: none"> ○事後研究協議 (50分) <ul style="list-style-type: none"> ・協議①：子どもの学びについて気づいたこと (グループ協議→全体交流) ・協議②：協議①に基づく授業デザインの振り返り (グループ協議→全体交流) <p>※各自の手元記録用に「協議メモ」を配布。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業者より振り返り (5分)
10分	○アンケート記入 (Google Form)

表 23：講義・演習「学瞰システムを活用した授業研究」の活動の流れ

1. 「子どもたちがどう学ぶか」「だから、学びをどう支援すればよさそうか」について学びを深めること

2. 協調学習の授業づくりや授業研究について学びを深めること

1は、協調学習の授業づくりの基本的な目標である。一定の実践経験や実践的知見を持つミドルリーダーでも、子どもたちの学びについて継続的に理解を深めること、深まった理解に基づいて学びをどう支援すればよさそうかについての考えを見直し続けることは常に重要な課題となる。対して2は、ミドルリーダーの学びにおいて特に重要になる目標である。協調学習の授業づくりに携わっていても、現場の条件は多様であり、ミドルリーダーには、状況に応じた具体的な取組が求められる。例えば、限られた時間で「仮説検証型授業研究」のエッセンスを取り入れる場合、どの時間をどのように短縮したらよいかといった課題に向き合うことになる。こうした課題に積極的に取り組んでいくには、協調学習の授業づくりを自身で実践したり、他者の授業研究に参加して学びを深めたりだけでなく、授業づくりの進め方や考え方についても理解しておく必要がある。

授業研究の題材には、本セミナーに継続参加する「協調学習マイスター」の先生が埼玉県
の公立高校で実践された公民の授業を提供いただいた。授業のねらいと子どもの学びの
実態について事前に十分な検討がなされ、想定が明確になっていた。こうした題材を提供
いただいたことは、プログラムのねらいに迫るうえで欠かせないものであった。授業デザ
インを表24に示す²。授業は、子どものゲーム時間に自治体が制約を課すという点が話題
を呼び訴訟事件ともなった「香川ゲーム条例」への賛否を問う課題を軸に、個人の自由の
尊重と公共の福祉の関係や教育権の所在などについて検討するものであった。

プログラムの参加者は、41名であった。内訳としては、継続／新規の割合が半々程度、
実践者／その他（指導主事などの教育行政関係者が多くを占める）の比が2：1程度であ
った。協議班は、「学瞰システム」を活用した仮説検証型授業研究に参加した経験を持つ受
講者を中心に、経験や属性が多様になるように編成した。

② 講義・演習「学瞰システムを活用した授業研究」の実施結果

受講者には「授業観察メモ」「協議メモ」を可能な範囲で提供してもらった。以下では、
このメモと活動の最後に記入いただいた「アンケート」をもとに、実施結果を見ていき
たい。アンケートの入力者は30名である。

まず、ねらいの1についてはおおむね達成できたと言えそうである。アンケートでは、
「本日のセミナーを通じて、協調学習の授業づくりや授業研究について（改めて）大事に
したいと思ったことを教えてください」という設問を設けた。これに対し、30名中24名
が子どもの学び方に対する気づきや、それに基づく支援策に関する内容を答えていた。

「メモ」を参考に具体的にどのような深まりがあったかの例を示す。例えば、エキスパー
ト資料については「穴埋めの答え合わせは時間がかかる。本論（憲法と条例の比較）にな
かなか入れなかった」といった見とりに基づき、「穴埋めは穴埋めが目的化？（記述式の）

メインの課題	ゲームをする自由は規制できるのか？
エキスパートA	「香川ゲーム条例」に対する訴訟の判決要旨の整理
エキスパートB	個人の自由と公共の福祉の関係
エキスパートC	教育内容は誰が決めるべきか
期待する解答の要素	ゲームの自由を尊重または規制することについて、 ・公共の福祉と個人の権利追究の関係 ・教育権の所在 ・自治体政府による社会権保障の必要性 などに触れて多面的・多角的に考察し、意見を表現する

表24：講義・演習「学瞰システムを活用した授業研究」の題材となった授業のデザイン

² 授業案等は、「公民 S1401 公共的な空間における基本原理」として付属 DVD に収録さ
れている。

問2・3のほうが条例を根拠に話していた。穴埋めの用い方は要検討」といった具体的な支援策が導かれた例があった。また、同じ場面について「『教育用ゲーム』など資料になり話題が出て、経験とひきつけて考えられていた」という気づきと「『教育用ゲームなら規制しなくて良いのでは?』など、エキスパートの理解より、自分の体験のイメージが強くでていた」という気づきが出され、協議の結果「意図とずれた側面と、自分ごととしてとらえた側面があった」といった整理がなされたなど、1つの学習場面の両面性が掘り下げられた例もあった。こうした例からは、受講者が、次の授業づくりへの目的意識を持って授業研究へ向かっていること、また、経験や専門、立場の違いが学びの多面的な見取りを可能にしていることが窺われる。

次に、ねらい2についてしてみると、こちらもほぼ達成できたと言えそうである。アンケートの「本日の研修を通じて、協調学習の授業づくりや授業研究について、ご自身の理解が(改めて)進んだと思いませんか?」(4択)の設問に対する回答は、「やや思う」4名、「そう思う」26名という結果であった。

受講者の中には、「学瞰システム」を活用した仮説検証型授業研究に初めて本格的に参加した受講者も多かったため、特に「学瞰システム」の活用可能性について理解が深まった例も多かったようである。アンケートの「感想」の設問には、多くの受講者が「学瞰システム」の有用性について記載していた。表25に例を示す。

さらに興味深いことは、表25の下線で示したように、こうした有用性の感想を寄せた受講者の多くが、自身の立場で「学瞰システム」や「仮説検証型授業研究」をどのように取り入れていきたいか、具体的な構想を合わせて述べてくれたことである。ここに示した例だけでなく、学瞰の有用性について記載した22名のうち14名にそうした記載があった。新規にセミナーに参加する実践者が、実践経験に基づいてシステムの活用のしどころを認識したり、継続的にセミナーに参加している実践者が、授業改善を「観点別評価」などの新たな課題と結びつけて推進していく可能性を実感したり、行政関係者の受講者が仮説検証型授業研究の教師の学びに対する有効性を具体的にイメージできたりという形で、協調学習の授業づくりや授業研究についてそれぞれの立場に応じて理解を深めることにつながった点は、このプログラムの大きな成果であった。

(5) 今後に向けて

連携各機関のご協力も得て、本年度も本セミナーを協調学習の授業づくりを推進する様々な立場のミドルリーダーの間での充実した学び合いの場として運営することができた。

他方、本セミナーに関して今後の課題となるのは、セミナーでの学びをとおして受講者に生まれた「次の問い」が、具体的な授業改善の取組として結実していく過程をいかにしてサポートするかという点である。例えば、表25の受講者感想に示された「学瞰システム」の活用構想は、受講者が授業改善の更なる質の向上を目指して、次に取り組みたい／取り組める課題である。受講者2が「学瞰システムを使った観点別評価」を勤務校での評定に組み込んでいくとしたら、あるいは受講者3が若手教員向けの研修を立ち上げるとし

受講者1 新規 実践者	生徒たちの反応や議論の内容が、まるで一緒に授業を受けているかのように見ることができて面白かったです。 <u>実際教員が近づくと間違っではいけないと萎縮してしまい引き出せるものも引き出せないこともあるため、後から振り返りもできる学躰システムは有効だなと思いました。</u>
受講者2 継続 実践者	どのような言葉がキーとなって、対話が進んでいくのか、子どもたち（我々もそうだと思うのですが……）が課題からそれそうになっても、「アシスト」「そもそもなぜ制限したの？」等、ふとした言葉で課題に戻っていく、その様相が学躰システムで明確にわかって勉強になりました。 <u>「学躰システム」を観点別評価にうまく使用できれば良いな、と思いました。</u>
受講者3 新規 行政関係者	子どもたちの思考やそれが変容していく過程を見とる上で非常に有効だと感じましたし、授業研究のかたちが変わる！と感じました。 <u>経験の浅い若い先生方にとっては、授業を容易に振りかえることができ、スキルアップに有効活用できると感じます。子どもたちの学びの過程を見とる形式の授業研究会をしっかりサポートしていきたい</u>

表 25：講義・演習「学躰システムを活用した授業研究」アンケートに記載された感想例

たら、何をどのように進めていきうるか？セミナーで学ぶミドルリーダーが各自の学校や自治体において協調学習の授業づくりの推進役として実質的に機能するためには、セミナーをとおして生まれたこのレベルの課題について、経験やアイデアを出し合いながら取り組んでいくことが必要になる。ただしこれは、セミナーの年間カリキュラムやプログラムの工夫だけで達成できる課題ではない。「学習科学に基づく継続的な授業改善を支えるための自治体や学校の枠を超えた学びの場」を次の課題解決につなげるために、自治体や学校の組織的な授業改善の取り組みの中でセミナーをどう位置づけていけるとよいか。教育委員会の先生方等とも連携しながら今後の発展可能性を模索したい。

5. ジュニアドクター育成塾事業

(1) 事業の概要

「ジュニアドクター育成塾事業」は、科学技術振興機構（JST）が主催する、小中学生を対象とした理数情報分野における次世代人材育成の委託事業であり、平成29年度から継続的に展開されている¹。東京大学の企画は、これまで2期に亘り採択され、CoREFが実施担当を担ってきた。本年度8月からは、同じくJSTが主催する高校生対象の人材育成事業と企画が統合され、小中高の長期的なスパンで能力資質を伸ばす「未来を切り拓くグローバル科学技術人材の育成プログラム：UTokyoGSC-Next」の「第1段階萌芽コース」として、これまでの蓄積を発展させるべく新スタートを切ることになった²。

CoREFは新企画においても、東京大学で人材育成のための社会連携を担う「生産技術研究所次世代育成オフィス（ONG）」と協力してプログラムの企画運営等を担当している。実施拠点は、前年度から引き続き「日立教室」と「川口教室」の2箇所である。「日立教室」ではNPO法人「日立理科クラブ」、川口教室では川口市教育委員会と「日本技術士会埼玉県支部」と連携させていただき、シニア技術士人材ネットワークも活用しながらプログラムを実施している。図15に概要を示す。

CoREF担当部分の目標は、STEAM的な見方、考え方と未来を拓く資質・能力を併せ

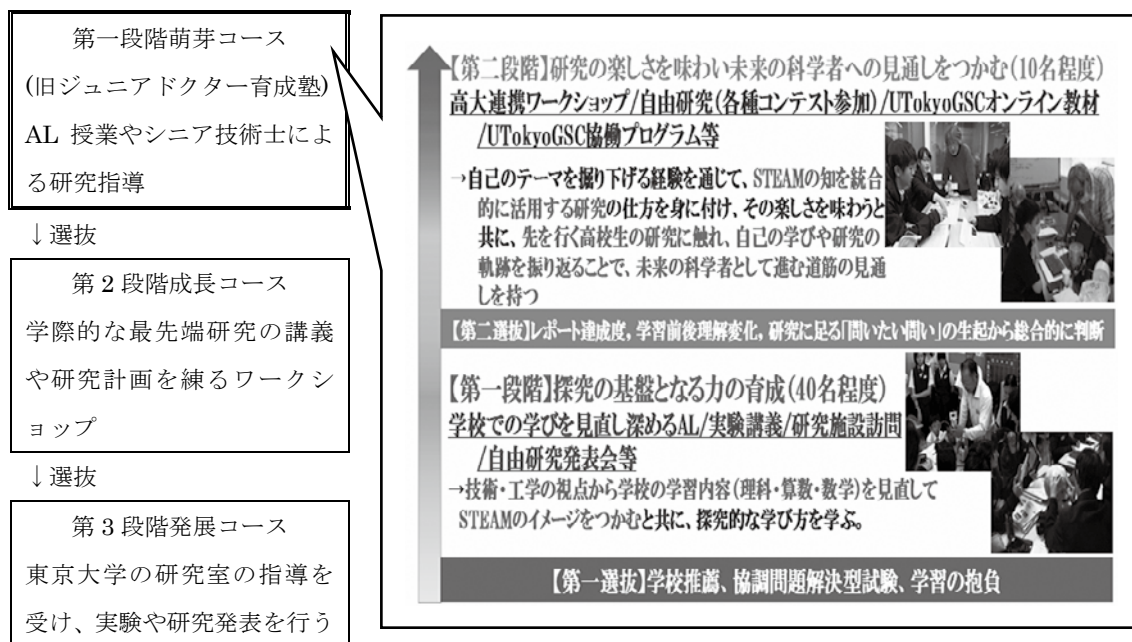


図15：令和5年度からのジュニアドクター育成塾（東京大学）企画概要

¹ 令和4年度までの活動については、各年度の報告書第1部第1章（巻末付属DVDにも収録）を参照いただきたい。

² 本企画の名称について、令和5年度は、混乱を避けるため、受講生向けに「Jr.Dr. 育成塾」という名称の使用を継続した。本報告書でも同様とする。

持ち、自ら「問うべき問い」を立てて仲間と探究できる未来の科学者の育成をとおして、小中高にわたる STEAM 資質・能力育成のプロセスモデル及び、シニア技術士人材を活用した STEAM 人材育成プログラムのモデルケースを提案することである。対象は理数情報分野に高い関心を持つ児童生徒に絞った企画になるが、育成したい人材の具体像は協調学習の授業づくりプロジェクトで育てたい児童生徒像と重なっている。また、様々な地域で科学教室の実施などによる草の根教育支援に携わるシニア技術士人材ネットワークを活用する体制づくりの方針は、協調学習の授業づくりプロジェクトにおけるネットワーク・オブ・ネットワークスの考え方を応用したものである。

(2) 令和5年度の活動

以下、今年度からの新たな展開を中心に活動について報告する。取り上げるのは2教室合同授業、第2段階や第3段階に在籍する高校生との交流会の2つのプログラムである。

① 2教室合同授業

今年度は、前年度から本格的に展開を始めた「川口教室」が軌道にのってきたことを受け、「日立教室」と「川口教室」でスケジュールを合わせ、「学校での学びを見直し深めるアクティブ・ラーニング」のプログラムの一環としてオンライン同期型合同授業を行った。「日立教室」は、恒常的に遠方者のオンライン参加を受け入れている。そこで、当日は、全ての活動を Web 会議システムで行う参加者、「日立教室」で対面で活動する参加者、「川口教室」で対面で活動する参加者が混在するハイブリッドな環境となった。

授業は中2クラスで行い、理数情報科目に高い関心を持つ受講生を対象に CoREF でデザインした教材を用いた。デザインを表 26 に示す³。エキスパート資料に学校では未習の内容も含まれており、また、期待する解答のレベルも高く、難易度の高い教材である。しかし、「一人では十分な答えが出ない課題をみんなで解こうとしている状況」が理解深化に向かう思考・対話のきっかけになることは、協調学習の授業づくりプロジェクトにおい

メインの課題	人工衛星「ひまわり」は、どうして毎日 24 時間日本の天気を観測し続けられるのだろうか？
エキスパート A	人工衛星の推進装置、軌道、高度
エキスパート B	地球の自転の向き、速度
エキスパート C	万有引力の法則、地球を回る物体の速度と重力の関係
期待する解答例	人工衛星「ひまわり」は、赤道上空の非常に高い高度にあり、地球の自転と同じ 24 時間で 1 周する速さで円軌道を周回しており、地球から見ると静止しているように見えるから

表 26：人工衛星「ひまわり」の授業デザイン

³ 授業案等は、「理科 A1405 人工衛星『ひまわり』」として付属 DVD に収録されている。

でも繰り返し確認されてきたことである。そこで、複雑な環境で課題の探究に集中するには、難易度が高いくらいの方がむしろ適当とも考えられる。実際に参加者は、参加形態の別を問わず高い集中力を発揮していた。

ただし、様々な参加形態を比較してみると、Web会議システムのホワイトボードツールを使った活動では、対面で1枚のホワイトボードを囲む場合に比べ、見ている参加者（モニター）が、突っ込みやつぶやきを発しづらく、建設的な相互作用が生まれにくいなどの課題も明確になってきた。これは、学校現場におけるICT活用にも通ずる課題であろう。授業づくりプロジェクトに参加する先生方とも連携しながら、改善策を検討していきたい。

② 高校生との交流会

次に紹介するのは、高校生との交流会のプログラムである。と言っても、単なる交流会ではなく、第2・第3段階に在籍する高校生の研究計画発表や研究発表を聴講し、わいてきた疑問や次に知りたくなった問を高校生にぶつけ、考えを出し合うというプログラムである。プログラムは2教室で自由研究に取り組んでいる中学生を対象に希望参加制とし、24名が参加した。

高校生の研究課題は「行列モデルによる日本産アカウミガメが地球温暖化で受ける影響の分析」「カニ殻からバイオプラスチックを生成する新規微生物の探索と同定」など、中学生には難しすぎるのではないかと思われるような内容であった。しかし、ここでも協調学習の授業づくりプロジェクトを振り返ると、「学譜」等では、「ジグソー活動を意識してエキスパート活動を行わせると、難易度の高い資料でも読みやすい」、「読み取りのための効果的な問を設定すればいつもより難易度の高い資料が読める」、また、「内容について理解が深まるにつれて、良い問が見出せるようになる」など、様々な気づきが蓄積されていた。そこで、これらを手掛かりに、各グループに1名の高校生が参加し、中学生はその高校生の研究発表について個人・グループで「わかったこと／わからなかったこと／もっと知りたいこと」をじっくり検討しておいたうえで高校生に質問してみるという流れで活動をデザインした。

その結果、交流会は40分という時間設定が短く感じられるほどに活発なものとなった。例えば、「行列モデルによる日本産アカウミガメが地球温暖化で受ける影響の分析」の研究を発表した高校生と交流した班では、参加者が「アカウミガメの生態系が変化すると、他の動物の生態系に連鎖的な影響があるという内容があったが、例えばどんな影響があるか」「生態系の固有性、という概念が出てきたが、それはどういう地域にでもあるものか。例えば川口市には川口市の固有性があるのか」など、研究内容に即した質問を次々と出すことができた。更にやり取りは、「研究テーマを選ぶとき、自分の好きなことをどうやってテーマに落とし込んでいくのか」「学校の勉強と研究の両立のために、どんな準備をしておけばよいか」などに発展した。交流会は、本企画のテーマである「小中高にわたる学び」について、受講生が見通しを開く機会になったと言えよう。

以上のように本企画は、協調学習の授業づくりプロジェクトから生まれたリソースを生

かして小中学生の発展的な学びのニーズに応えると共に、学校外の学びの場ならではのチャレンジをとおして授業づくりの仮説を試してみる場としても有効に機能している。次年度以降も、得られた知見をいかにプロジェクトに還元しうるかを検討しながら、さらに企画を充実させていきたい。

6. 今年度の研修実施状況

今年度 CoREF で実施した研修、講演等の一覧（全 178 回）を次ページの表 27～29 に示す（1 月以降のスケジュールについては 12 月末日時点での予定）。

研修のカテゴリ別内訳を見ると、最も多かったのが専門研修の 73 回である。専門研修には、第 2,3 節で紹介したプロジェクトの研究会や第 4 節で紹介した本郷学習科学セミナーのようなプロジェクト参加者を対象にしたものから、教育センター等が主催する希望者向けの研修まで含む。前者については、ビデオや対話記録を活用した授業研究の演習や子どもの学びのシミュレーションによる授業検討会、実践交流など、授業研究に関わる実践的な内容が中心である。後者ではそれに加え、授業体験を中心とした入門研修も含まれている。こうした専門研修のプログラムの一部は、第 2 章第 2 節で示している。

専門研修の開催形態については遠隔同期が 36 回（49.3%）と最も多く、ついで対面 27 回（37.0%）、対面と遠隔同期のハイブリッド 10 回（13.7%）と、ハイブリッドがやや少なくなった以外は、昨年度とほぼ同じ割合である。専門研修におけるオンラインの活用が当たり前になる中で、今後もオンラインでも質の高い参加型の研修をデザイン、実施できるようノウハウを蓄積、活用していきたい。

次いで多かったのは授業研究会の 71 回である。授業研究の開催形態の内訳を見ると、対面のみが 64 回（90.1%）と昨年度からさらに増加した。それ以外に対面＋遠隔同期（校内の先生方が対面で授業研究を行うところに他校の先生方や研究者が遠隔同期で参加するような形態）4 回（5.6%）、遠隔同期のみ 2 回（2.8%）、オンデマンド＋遠隔同期（授業ビデオを事前視聴したうえで遠隔同期で研究協議を行うような形態）1 回（1.4%）となっている。コロナの影響がなくなったことで、（CoREF が講師として参加するような）授業研究会は対面が中心の形に戻ったと言える。ただし、専門研修のいくつかは過去の記録を活用して授業研究を体験するプログラムを含む。また、学販システム（詳細は、第 2 部第 4 章第 3 節）を活用することで、各学校でインフォーマルに行う授業研究の中には、リアルタイム対面以外の形態も増加してきているようである。

次いで多かったのは、11 回の校内研修、6 回の年次研修（初任者研修、中堅教員研修等）、5 回の管理職、1 回の指導主事研修である。年次研修のうち 4 回を占める埼玉県高等学校初任者研修授業力向上研修のプログラムについては、第 2 章第 4 節に詳述した。これらの研修以外にシンポジウム等の一般向けイベントでの情報発信を 11 回行った。

続く第 2 章では、今年度文部科学省「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」の委託（受託者：聖心女子大学）を受けて行った「学習科学に基づく授業研究モデル開発」をテーマとする事業の成果として、CoREF の研修の大枠となるモデルや核となる集合研修のプログラム例、各学校がどのように校内研修（授業研究会）を進めているかなどを報告している。あわせてご覧いただきたい。

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

連番	日時	主催	名称	主な対象	カテゴリ	形態
1	4月20日	広島県安芸太田町	安芸太田町らしい教育の布り方懇話会第5回	町民	一般向け	対面
2	4月24日	埼玉県教育委員会	令和5年度 未来を拓く「学び」プロジェクト 指導主事研修会	指導主事	指導主事研修	対面
3	4月28日	埼玉県教育委員会	令和5年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修	県内高等学校初任者	年次研修	対面
4	5月9日	京都市立西院小学校	第1回校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
5	5月10日	江府町立奥大江山江戸学園	校内研究会	校内教職員	校内研修	遠隔同期
6	5月16日	安芸太田町教育委員会	令和5年度第1回安芸太田町「学びの変革」推進協議会	町内教職員	専門研修	対面+遠隔同期
7	5月17日	豊後高田市立高田小学校	校内研修会	校内教職員	校内研修	対面+遠隔同期
8	5月17日	山形県立東根学館高等学校	校内研修会	校内教職員	校内研修	遠隔同期
9	5月24日 6月9日	埼玉県教育委員会	令和5年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修	県内高等学校初任者	年次研修	遠隔同期+オンデマンド
10	5月29日	久喜市立江面小学校	校内授業研究会	校内教職員及び市内教職員	授業研究会	対面
11	5月27日	CoREF	令和5年度 第1回本郷学習科学セミナー	関係小中学校教員/指導主事	専門研修	遠隔同期
12	6月3日	New Education Expo 実行委員会	New Education Expo 2023 (大阪)	主に教育委員会、小学校・中学校・高等学校の教員	一般向け	対面
13	6月7日	静岡県立沼津高等学校	令和5年度静岡県公立高等学校等副校長・教頭会研究協議会	県内公立高等学校等副校長及び教頭	管理職研修	対面
14	6月9日	富山大学教育学部附属小学校	富山大学教育学部附属小学校 令和5年度教育研究発表会	校内教職員、県内外教職員、教育委員会関係者等	一般向け	対面
15	6月9日	高根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」協調学習に係るキックオフ会	県内で協調学習を推進する立場の教員	専門研修	対面+遠隔同期
16	6月9日	清川村教育委員会	令和5年度「きよかわ学びづくり推進事業」における校内研究会(緑中学校)	校内教職員	校内研修	対面
17	6月11日	NPO法人アスクネット	第4回「ENGINE in Nagoya」	キャリアカウンセラーなど教育関係者	一般向け	対面
18	6月10日	New Education Expo 実行委員会	New Education Expo 2023 (大阪)	主に教育委員会、小学校・中学校・高等学校の教員	一般向け	対面
19	6月16日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」理科部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	授業研究会	遠隔同期
20	6月19日	クラーク記念国際高等学校	「知識構成型ジグソー法」研修Ⅰ	校内教職員	専門研修	遠隔同期
21	6月20日	埼玉県立総合教育センター	令和5年度高等学校中堅教諭等資質向上研修共通研修第1日	高等学校中堅教諭等資質向上研修対象教員	年次研修	遠隔同期
22	6月20日	安芸太田町教育委員会	百河内小学校・高賀小学校合同授業研究	校内教職員	授業研究会	対面
23	6月20日	埼玉県教育委員会	令和5年度 埼玉中堅教諭等資質向上研修	県内高等学校中堅研修対象者	年次研修	遠隔同期
24	6月21日	品川区立八潮学園	校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
25	6月21日	安芸太田町教育委員会	加計小学校授業研究	校内教職員	授業研究会	対面
26	6月21日	安芸太田町教育委員会	令和5年度第2回安芸太田町「学びの変革」推進協議会(加計中学校)	町内教職員	授業研究会	対面
27	6月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立南賀小学校校内研修	校内教職員	校内研修	対面
28	6月23日	宮崎県教育委員会	第72回宮崎県教育委員会算数・数学教育研究協議会・西臼杵大会	県内教職員	一般向け	対面
29	6月25日	独立行政法人国際協力機構 東京センター	2023年度教師海外研修 UJICA 東京主催	研修参加教員	専門研修	対面
30	6月26日	飯塚市教育委員会	令和5年度 飯塚市協調学習推進に係る研修会第1回	県内で協調学習を推進する立場の教員	専門研修	対面
31	6月24日	CoREF	令和5年度 第2回本郷学習科学セミナー	関係小中学校教員/指導主事	専門研修	遠隔同期
32	6月26日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」保健体育部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
33	6月27日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」工業部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
34	6月28日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」示範授業(浦和一女高校、国語/地歴/外国語)	県内教職員	授業研究会	対面
35	6月28日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」示範授業(八潮南高校・公民)	県内教職員	授業研究会	対面
36	6月28日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」示範授業(入間南高校・数学)	県内教職員	授業研究会	対面
37	6月30日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」外国語部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
38	7月3日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」看護・福祉部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
39	7月3日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」家庭部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
40	7月4日	埼玉県教育委員会	令和4年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」数学部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
41	7月5日	豊後高田市教育委員会	「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導方法改善実践研修会(高田小学校)	校内教職員	授業研究会	対面
42	7月6日	静岡県総合教育センター	令和5年度静岡県総合教育センター主催研修「主体的・対話的で深い学び」を支える授業研究	県内公立小中高特支学校教員	専門研修	対面
43	7月10日	豊後高田市教育委員会	「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導方法改善実践研修会(蔵里学園)	校内教職員	授業研究会	対面
44	7月11日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」農業部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	授業研究会	遠隔同期
45	7月12日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」国語部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
46	7月12日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」地歴部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
47	7月12日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」公民部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
48	7月12日	CoREF/延岡市教育委員会	学歴システム導入研修会(南方小学校)	校内教職員	専門研修	対面
49	7月13日	高根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」第2回研修会(大田高校)	県内で協調学習を推進する立場の教員	授業研究会	対面
50	7月14日	瀬戸(OKAYAMA)新しい学びプロジェクト	瀬戸(OKAYAMA)新しい学びプロジェクト 公開研究授業・連絡協議会(瀬戸高校)	プロジェクト参加教員	授業研究会	対面
51	7月19日	延岡市学校教育研究所	令和5年度 延岡市学校教育研究所常任研究教育研究発表会小学校部会(一ヶ岡小学校)	延岡市学校教育研究所常任教員及び市内教員	授業研究会	対面
52	7月22日	CoREF	令和5年度 第3回本郷学習科学セミナー	関係小中学校教員/指導主事	専門研修	遠隔同期
53	7月26日	公益財団法人才能開発教育研究財団	第49回教育工学研修中央セミナー「IMTMSフォーラム2023」	セミナー参加教職員/指導主事	一般向け	対面
54	7月26日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」芸術部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
55	7月27日	堺市教育委員会	令和5年度「がんばる学校園サポート」	堺市立五箇荘中学校群教職員	専門研修	対面
56	7月29日	新しい学びプロジェクト研究協議会 CoREF	令和5年度 新しい学びプロジェクト拡大研究推進委員会	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
57	7月31日	豊後高田市教育委員会	第2回 まなびの扉	町内教職員	専門研修	対面+遠隔同期
58	7月31日	浜田市教育委員会	令和5年度浜田市協調学習(知識構成型ジグソー法)研修会	浜田市内各小中学校管理職及び教員	専門研修	対面+遠隔同期
59	8月1日	長野県立保来会栄養教諭・学校栄養職員部会	第42回長野県立保来会栄養教諭・学校栄養職員部会夏期研修会	県内栄養教諭・学校栄養職員	専門研修	遠隔同期
60	8月2日	静岡県立浜松湖東高等学校	校内研究会	校内教職員	授業研究会	対面
61	8月3日	新潟県立教育センター	新潟中堅教諭等資質向上	県内小中高特別支援学校中堅教員	年次研修	オンデマンド
62	8月3日	CoREF/川口市立高等学校・附属中学校	学歴システム導入研修会	校内教職員	専門研修	対面
63	8月4日	埼玉県立総合教育センター	令和5年度県立学校等新任校長研修会(第2日)	県立高等学校等新任校長	管理職研修	遠隔同期
64	8月4日	埼玉県立総合教育センター	令和5年度県立高等学校等新任校長研修会(第2日)	県立高等学校等新任校長	管理職研修	遠隔同期
65	8月5日	内田洋行教育総合研究所	学習科学の視点に基づく授業研究ワークショップ(東京会場)	主に教育委員会、小学校・中学校・高等学校の教員	専門研修	対面
66	8月7日	Google for Education Japan	教育関係者向けイベント「Google for Education コミュニティイベント」	全国教育関係者(Google for Education 認定教育者)	専門研修	対面
67	8月8日	山口県教育庁高校教育課	令和5年度山口県高等学校等教育課程研究協議会	県内教員	専門研修	遠隔同期
68	8月18日	京都市立西院小学校	第3回・第4回分授業研究事前検討会	校内教職員	授業研究会	対面
69	8月19日	CoREF	令和5年度 第4回本郷学習科学セミナー	関係小中学校教員/指導主事	専門研修	対面+遠隔同期
70	8月20日	CoREF	学歴レコーダを活用した授業研究に関するワークショップ	関係小中学校教員/指導主事	専門研修	対面
71	8月22日	埼玉県立総合教育センター	令和5年度県立学校等新任校長研修会(第2日)	県立高等学校等新任教頭	管理職研修	遠隔同期
72	8月22日	埼玉県立総合教育センター	令和5年度県立高等学校等新任教頭研修会(第2日)	県立高等学校等新任教頭	管理職研修	遠隔同期
73	8月22日	豊後高田市教育委員会	第3回 まなびの扉	町内教職員	専門研修	対面+遠隔同期
74	8月26日	内田洋行教育総合研究所	学習科学の視点に基づく授業研究ワークショップ(大阪会場)	主に教育委員会、小学校・中学校・高等学校の教員	専門研修	対面
75	8月29日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」全体教科部会①	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
76	8月30日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く「学び」プロジェクト」全体教科部会②	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
77	8月30日	春日市立江戸川小中学校	協調学習に関する研修会	校内教職員	校内研修	対面
78	8月31日	北海道教育研究所	令和5年度(2023年度)第78回北海道教育研究所連盟研究発表大会(十勝大会)兼第66回全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会	北海道教育研究所連盟機関の所員及び研究員、教育関係者等	専門研修	対面
79	9月4日	鶴ヶ島市立西中学校	校内研修会	校内教職員	授業研究会	対面

表 27：令和5年度の研修実施状況一覧(1/3)

令和5年度活動報告書 第14集

連番	日時	主催	名称	主な対象	カテゴリ	形態
80	9月11日	埼玉県教育局	魅力ある県立高校づくり勉強会	指導主事	専門研修	遠隔同期
81	9月16日	厚木市教育委員会	令和5年度 厚木市教育研究所「寺子屋講座(主体的・対話的で深い学びを 実現するための授業改善)」	市立小中学校教職員	専門研修	対面
82	9月30日	CoREF	令和5年度 第5回本郷学習科学セミナー	関係小中高教員/指導主事	専門研修	遠隔同期
83	9月19日	安芸太田町教育委員会	令和5年度第3回安芸太田町「学びの革新」推進協議会(安芸太田中学校)	校内教職員	授業研究会	対面
84	9月20日	安芸太田町教育委員会	簡賀小学校・戸内小学校合同授業研究	町内教職員	授業研究会	対面+遠隔同期
85	9月21日	京都市立西院小学校	第3回校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
86	9月27日	品川区立八潮学園	校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
87	9月28日	清風学園 清風中学校・高等学校	第1回協調学習に関する研修会	校内教職員	授業研究会	対面
88	10月3日	最上教育事務所	令和5年度 学習指導力向上研修会	管内小学校・中学校等研究主任等、教育マ イスター教員、フォローアップ・ステー ジアップ研修受講希望教員、管内市町村教育 委員会学習指導担当者 等	専門研修	遠隔同期
89	10月4日	埼玉県教育委員会	令和5年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修	県内高等学校初任者	年次研修	遠隔同期
90	10月5日	江府町立奥大山江府学園	授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
91	10月5日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(出雲商業高校・国語)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
92	10月6日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(情報科学高校・保健体 育)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
93	10月7日	日本STEM教育学会	日本STEM教育学会 第6回年次大会	学会員(全国教育関係者)	一般向け	遠隔同期
94	10月10日	安芸太田町教育委員会	加計中学校 授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
95	10月11日	安芸太田町教育委員会	道徳教育推進協議会(戸内小学校)	町内教職員	授業研究会	対面+遠隔同期
96	10月16日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」保健体育部における教科 部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
97	10月16日	鶴ヶ島市立西中学校	校内研修会	校内教職員	授業研究会	対面
98	10月16日	清風学園 清風中学校・高等学校	校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
99	10月17日	静岡県立浜松湖東高等学校	校内研修会	本校教員・校外参加者	授業研究会	対面
100	10月17日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」地歴部における教科部会 ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
101	10月18日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(大田高校・音楽)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
102	10月21日	東北大学	PDセミナー「後期中等教育と大学教育の接続」	大学教員等	一般向け	遠隔同期
103	10月23日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(宮代高校・保 険体育)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
104	10月24日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(皆野高校・商業)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
105	10月24日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(矢上高校・数学)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
106	10月24日	京都市立西院小学校	第4回校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
107	10月26日	飯塚市立立岩小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
108	10月27日	京都市立西院小学校	第5回授業研究事前検討会	校内教職員	授業研究会	対面+遠隔同期
109	10月30日	清風学園 清風中学校・高等学校	第2回協調学習に関する研修会	校内教職員	授業研究会	対面
110	10月31日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(松伏高校・情 報)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
111	10月31日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(深谷高校・地 歴)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
112	11月1日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」理科部会における教科部会 ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
113	11月1日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」家庭部会における教科部会 ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
114	11月2日	清風学園 清風中学校・高等学校	第3回協調学習に関する研修会	校内教職員	授業研究会	対面
115	11月6日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(津和野高校・国語)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
116	11月6日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」工業部会における教科部会 ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
117	11月7日	福井県教育庁	「引き出す・楽しむ教育」推進事業 学校訪問および講演会	県内小中学校教職員	専門研修	対面
118	11月7日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」外国語部会における教科部 会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
119	11月7日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(津和野高校・化学)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
120	11月8日	飯塚市教育委員会	令和5年度 飯塚市協調学習推進に係る研修会第2回(庄内中学校)	県内で協調学習を推進する立場の教員 校内教職員	授業研究会	対面
121	11月8日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(川越総合高校・ 美術)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
122	11月8日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(上尾高校・公民)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
123	11月9日	浜田市教育委員会	浜田市協調学習研究指定校公開授業(三隅中学校)	市内教職員	授業研究会	対面
124	11月10日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(矢上高校・国語)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
125	11月10日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(坂戸高校・理 科)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
126	11月14日	安芸太田町立加計中学校	第71回広島県中学校視聴覚教育研究大会	県内教職員	一般向け	対面
127	11月15日	安芸太田町立安芸太田中学校	安芸太田中学校 協調学習地域公開	町内教職員・保護者	授業研究会	対面
128	11月15日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(出雲高校・数学)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
129	11月15日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」数学部会における教科部会 ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
130	11月16日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(益田高校・国語)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
131	11月17日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(松江農林高校・保健体 育)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
132	11月17日	クラーク記念国際高等学校	「知識構成型ジグソー法」研修Ⅱ	校内教職員	専門研修	遠隔同期
133	11月17日	高砂市中学校社会科部会	令和5年度高砂市内社会科研究会	市内教職員	授業研究会	対面
134	11月17日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(所沢商業高校・ 外国語)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
135	11月20日	春日部市立武里中学校	校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
136	11月20日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」国語部会における教科部会 ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
137	11月21日	清川村教育委員会	令和5年度「きよかわ学びづくり推進事業」における校内研究会(緑中学校)	校内教職員	校内研修	対面
138	11月22日	島根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(益田高校・英語)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び 校内教職員	授業研究会	対面
139	11月22日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」農業部会における教科部会 ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
140	11月24日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(越ヶ谷総合技 術高校・工業)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
141	11月14日	第71回広島県中学校視聴覚教育研究大会実行委員会	第71回広島県中学校視聴覚教育研究大会	県内小中学校教職員	授業研究会	対面
142	11月13日	豊後高田市教育委員会・九重町教育委員会・ 延岡市教育委員会	協調学習が結ぶ自治体を越えた繋がりが！ 令和5年度第1回授業実践 研究協 議	市町内教職員	授業研究会	オンデマンド+遠 隔同期
143	11月14日	京都市立西院小学校	第6回授業研究事前検討会	校内教職員	授業研究会	対面+遠隔同期
144	11月22日	延岡市立南方小学校	授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
145	11月24日	清風学園 清風中学校・高等学校	令和5年度「新しい学びプロジェクト」授業研究会	一般及びプロジェクト参加教員	授業研究会	対面
146	11月25日	CoREF	令和5年度「新しい学びプロジェクト」教科別研修会	プロジェクト参加教員	授業研究会	対面
147	11月25日	CoREF	令和5年度 第6回本郷学習科学セミナー	関係小中高教員/指導主事	専門研修	遠隔同期
148	11月27日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(岩槻北陵高校・ 国語)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
149	11月28日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(鳩ヶ谷高校・ 農業)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
150	11月29日	中部大学第一高等学校	職業教育	校内教職員	校内研修	対面
151	11月29日	飯塚市立飯塚小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
152	11月29日	品川区立八潮学園	校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
153	12月4日	飯塚市立立岩小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面

表28：令和5年度の研修実施状況一覧(2/3)

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

連番	日時	主催	名称	主な対象	カテゴリ	形態
154	12月11日	京都市立西院小学校	第6回校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
155	12月11日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」芸術部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
156	12月15日	延岡市教育委員会	令和5年度「新しい学びプロジェクト全国大会」延岡市協調学習研究発表会	一般及びプロジェクト参加教員	専門研修	対面+遠隔同期
157	12月16日	CoREF	新しい学びプロジェクト教科別研修会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面+遠隔同期
158	12月16日	CoREF	令和5年度 第7回本郷学習科学セミナー	関係小中高校教員/指導主事	専門研修	遠隔同期
159	12月19日	埼玉県教育委員会	令和5年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」授業研究会(芸術総合高校・芸術)	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
160	12月21日	高根県教育委員会	令和5年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会(松江農林高校・農業)	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
161	12月25日	埼玉県立上尾特別支援学校	アクティブラーニングの手法を用いた職員研修	校内及び県内特別支援学校教員	専門研修	対面
162	1月10日	京都市立西院小学校	第7回授業研究事前検討会	校内教職員	授業研究会	対面
163	1月15日	安芸太田町教育委員会	加計小学校授業研究	校内教職員	授業研究会	対面
164	1月20日	CoREF	令和5年度 第8回本郷学習科学セミナー	関係小中高校教員/指導主事	専門研修	遠隔同期
165	1月23日	延岡市立南方小学校	授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
166	1月23日	豊後高田市教育委員会	「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導方法改善実践研修会(戴原学園)	校内教職員	授業研究会	対面
167	1月24日	豊後高田市教育委員会	「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導方法改善実践研修会(高田小学校)	校内教職員	授業研究会	対面
168	1月24日	品川区立八潮学園	校内研修会	校内教職員	校内研修	対面
169	1月27日	新しい学びプロジェクト研究協議会 CoREF	令和5年度 新しい学びプロジェクト第2回教科部会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面+遠隔同期
170	1月30日	埼玉県立蕨高校	校内研修(授業改善研修)	校内教職員	校内研修	対面
171	2月1日	安芸太田町教育委員会	令和5年度第4回安芸太田町「学びの変革」推進協議会(加計小学校)	町内教職員	授業研究会	対面
172	2月2日	日本STEM教育学会	JSTEM イベント	学会員(全国教育関係者)	一般向け	遠隔同期
173	2月2日	安芸太田町教育委員会	戸河内小学校・筒賀小学校授業研究	校内教職員	授業研究会	対面
174	2月5日	京都市立西院小学校	第7回校内授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
175	2月7日	埼玉県教育委員会	令和5年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修	県内高等学校初任者	年次研修	対面
176	2月8日	清川村教育委員会	令和5年度「きよかわ学びづくり推進事業」における校内研究会(緑中学校)	校内教職員	校内研修	対面
177	2月8日	久喜市教育委員会	未定	市内中学校教職員	専門研修	対面
178	2月14日	文化学園長野中学・高等学校	公開授業研究会	校内教職員	授業研究会	対面
179	3月2日	CoREF	令和5年度 第9回本郷学習科学セミナー	関係小中高校教員/指導主事	専門研修	対面+遠隔同期

表 29：令和5年度の研修実施状況一覧(3/3)